
THE ENDS OF THE LIFE

JOHNEY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE ENDS OF THE LIFE

【Nコード】

N8508A

【作者名】

JOHNEY

【あらすじ】

その世界には、「不死鳥」と呼ばれる世にも美しい鳥が存在するという。その生き血には「不老不死」の力があるとされ、人間は皆、その神秘の鳥を捜し求めている。そもそも、不死鳥は本当に存在するのか？その生き血に宿するという力は本当なのか？それを知る者はいのか？そして、老けることなく死ぬことのない命とは、幸福なのか？全ては疑問のまま。不死鳥の美しい姿に魅せられた少女が、強く・勇ましく・けな気に生きる。そして、少女が出会った一人の不思議な青年は、「不死鳥」に限りなく近い存在であった。

No.1 彼女の序章

昼間だというのに、あまり明るくない湿気た空から一枚の羽が舞いながら森の中に降下していく。

その色は淡い薄紅色で、光の加減によってはオレンジ色にも金色にも見え、世にも奇妙な形をしている。

ゆっくりと静かに地へと落ち、その羽はまるで誰かを待っているかのようにその場で落ち着いている。

突風が吹いても舞い上がりず、ずっとその場に静止している。

そこから少し離れた所を、ゆっくりと辺りを見回しながら歩く少女がいた。

何かを探しているようだが、その足取りは軽い。

地面に無数に落ちている葉や枝を踏むと、何とも秋らしい音色に出合う。

その音を悠長に聞き入るわけでもなく、少女はさっそうと森の中を歩いていた。

先ほどまで足早に歩いていた少女は、突然何の前触れもなく立ち止まった。

「これは……………」

そう言つて少女が拾い上げたのは、淡い薄紅色の羽だった。

少女はゴクリと生唾を飲み込むと、その羽を片手に森を風の如く引き返して行った。

商業都市コルサットの外れにある大きな洋館は、決して美しいものではない。

コルサットに住む者たちですら、その存在を良くは思っていない。

しかし、50年以上も前からその洋館は、陽の当たらない大きな土地に重々しく佇んでいる。

人々は言う、「亡霊が住みついている」と。

そう、それは1年前の満月の夜に姿を現した。

その日に限つて、何年もの間空き家となっていたはずのその洋館の一室から、明かりがもれているのを、何人もの人間が確認した。

それは、洋館の二階の一番右端にある部屋である。

住人も管理人も居ないその洋館に夜な夜な明かりが灯るのはおかしい。

きつと、何者かが忍び込んだのだらうと、コルサットの者たちは考えた。

しかし、洋館の頑丈な門や玄関に蓄積されたホコリは、きれいに積もったままだった。

それでも、光は確かに洋館の一室からもれている。

よくよく見れば、部屋の中で数人の影がチラチラと動いているのも確認できた。

それらは必然的に「亡霊」というものを連想させる要素が十分だった。

その噂は瞬く間にコルサット中に広まった。

それから、亡霊が住み着いた洋館は奇妙な空気を漂わせながら、その腰を据えている。

昼間のコルサットは、賑わいに満ちている。

商業都市と言われるだけあって、街中には数多くの商店が軒を連ねている。

毎日が特売日のように全ての商品が安価で、それらを求めて遠方からわざわざこのコルサットを訪れる者も少なくない。

コルサットは世界有数の商業都市の中で、最も有名な商いの都なのである。

一日では、とても全ての物を見て回ることができないほど、大量の衣類や食料品、日用品などが立ち並ぶコルサットのメインストリートは、今日も騒がしいほど賑わっていた。

そんな商店街に見向きもせず、街の外れに繋がる細い道を駆け抜ける少女がいた。

その手には、薄紅色の羽が握られている。

林に囲まれたその細い道を奥へ奥へと進んで行くと、徐々にコルサットの騒がしい民衆の声が聞こえなくなっていく。

道の先には、例の洋館が重々しい空気をかもし出して、少女を待っている。

しかし、少女は道をそれて、林の中へと入っていった。

林の中へ1メートル程入った所で、少女は立ち止まった。

辺りをキョロキョロと見回すと、その場にしゃがみ込み、地面に生い茂る草を掻き分け始めた。

すると、そこに鉄の突起が顔を出した。

少女はその突起を握り締めると、勢い良く上へと引っ張った。

そう、それは秘密の通路に繋がる秘密の入り口だったのだ。

ポツカリと口を開けた1平方メートル四平の穴に、少女は迷うことなく滑り込んだ。

少女によって開けられた地面の扉は、自動的にゆっくりと静かに閉まった。

薄暗い通路を、少女は再び走り始めた。

少女の靴が奏でる音が地下の通路の中で、奇妙に響き渡る。

通路を50メートル程進むと、銀色の鉄の扉がぼんやりと姿を現した。

その扉の取っ手の近くにあるテンキーのようなもので、少女は素早く何かのコードを入力した。

すると、鉄の扉はゆっくりと手前に開いた。

そして、少女が中へ入ると、自動的にゆっくりと閉まった。

鉄の扉の先は、無数のライトと数え切れない程のコンピュータに囲まれた世界だった。

白衣を身に着けた複数の男と、パソコンに向かう4人の男女が、鉄の扉が閉まるのと同時に少女の方を一齐に向いた。

「どこへ行っていた。」

白衣の男が少女に訊ねた。

「森よ。」

少女が無表情で答えた。

すると、白衣の男は足音も立てずに少女の前に歩み寄った。

「無断で外へ出るなど言っておいたはずだ。」

白衣の男の口調には、力強さはあるが心が無い。

少女は表情をしかめ、

「私の勝手でしょう。」

と白衣の男をにらみ付け、わざと肩をぶつけて男の隣をすれ違った。

その部屋の奥に、もう一つ鉄の扉がある。

その扉の脇にもテンキーがついていた。

少女は再び手馴れた素振りでもコードを入力し、開いた扉の向こうに姿を消した。

扉の先は、薄暗い石の階段が不気味に上へと伸びている。

少女は、ゆっくりとその階段を上り、その先にある木製の扉を開けた。

扉を開けると同時に少女は森で拾った羽を胸のポケットにわざと目立つように差し込んだ。

少女が開けた扉の先は、洋風のインテリアが並ぶ広い廊下だった。

その廊下の窓の外にはコルサットの夜景がきらびやかに映っている。

少女は先ほどとは打って変わって、その口元に微笑を浮かべながら、その廊下を歩き出した。

その間に数人、少女とすれ違った。

その全ての者が、少女を見て驚愕の表情を浮かべて少女を凝視する。それを見て、少女は誇らしげな笑みを浮かべ、しかし、どこか冷た

さのある態度で彼らの横を通り過ぎて行く。

少女は、その廊下の一番端にある一室の前で立ち止まった。

その扉のノブに手を伸ばし、どこか緊張したような素振りで戸を開いた。

「失礼します。」

少女の声が部屋の中に響いた。

「誰かね？入室を許可した覚えはないが…。」

部屋の中にいた中年の男が少女の声に応えた。

「緊急の用がございまして、失礼を承知で参りました。」

少女は軽く会釈をする。

中年の男は、会釈をして下げた頭を少しずつ上げた少女の左胸に光る、薄紅色の羽を見た。

「そ、それは、まさか…！？」

「お気づきですか？」

少女が不敵な笑みを浮かべながら、中年の男のそばに歩み寄った。

中年の男の表情は、どこか硬い。

少女は胸に挿していた羽を手にとると、それをヒラヒラと躍らせた。

「チーフもご存知の通り、これはかの有名な「不死鳥」の羽。
この「ロングシャドウ」の研究員が必死に探し求めている代物です。
私はこれを一研究員として、この場に持ってきたわけでは、ありません。」

少女の瞳には、どこか鋭さがある。

少女の頭の中では、過去の苦い出来事がグルグルと廻り、駆け巡っていた。

それは、今からさかのぼること、半年前。

それは、突然起きた。

少女は「不死鳥研究団体ロングシャドウ」内で最も有力な人材として有名だった。

将来、幹部候補でもあった。

しかし、それはその日に崩れた。

少女は、不死鳥の研究に没頭する毎日を送っていた。

少女にとって不死鳥は、憧れそのものなのだ。

紅の大きな羽を羽ばたかせ、大空を自由に舞う、その姿を一目見た
いという一心で、少女は日々不死鳥の行方を追っていた。

その姿が確認されることはマレで、存在しているかどうかさえ、未確認である。

しかし、少女は不死鳥の存在を純粹に信じていた。

なんの根拠もないが、少女はいつか必ずその姿を見ると、心に強く誓っていた。

多くの不死鳥研究家は、その不死鳥の能力に魅せられている。

不死鳥は、その名の通り死なない鳥。

永遠の命を司る、人類の憧れの象徴なのである。

また、不死鳥のその鮮血を浴びることによって、不老の能力を得ることができると伝えられている。

つまり、不死鳥の鮮血が手に入れば、不老不死の身体になることができるということなのだ。

そのため、ほとんどの不死鳥研究家たちは、邪まな欲望にかられ、血眼になって不死鳥を搜索している。

少女は、実家で父親と2人で細々と暮らしていた。

けして裕福な家庭とは言えないが、2人は素朴で幸せな毎日を送っていた。

少女が幼い頃から父親は朝から働きに出ていたため、少女はいつも独り、家で留守番をしていた。

その父親が居ない寂しい家の中で、少女はいつも不死鳥に関する文献を読みあさっていた。

少女は、不死鳥の限りない能力よりも、その姿形の美しさに魅了された。

いつか、必ずこの目で見よう。少女は、そう決心をした。

決心を固めてからの少女の行動は早く、不死鳥研究団体ロングシャドウの存在を聞きつけると、迷わず入団をした。

それが、少女の不運の始まりだったのかもしれない。

少女がロングシャドウに入ってから数週間後、少女は早くもロングシャドウ内で1、2を争うほどの、研究家へと成長した。

その、不死鳥に関しての知識の豊富さや、危険な場所へも臆せず赴く度胸や、運動神経の良さが、他の研究員の上をいつていたのだ。

それによって、周囲の研究員から妬まれるようになっていった。

そんなある日、少女は研究所内であらぬ濡れ衣をきせられる。

研究に使っていた不死鳥の貴重な文献を、彼女が盗み出し焼失させたというのだ。

そんなことを、少女がするわけがなかった。

少女にとって、不死鳥の文献は何より大切な物。

そんな物を盗み出し、しかも燃やすなどということが、少女にできたであろうか。

少女は、そんなモラルの低い人間ではなかった。

しかし、日ごろから少女を妬む人間は数多くいて、濡れ衣を着せられて困っている彼女を見ても、誰も助けようとはしなかった。

さらに、少女の罪を立証するべく、ロングシャドウの研究員たちは、彼女の唯一の肉親である父親を連れてきて、乱暴に拷問した。

「娘は、そんなことをする人間ではない。何かの間違いだ。」

父親は、どんなに傷めつけられても、その言葉だけは絶対に曲げなかった。

そして、少女の濡れ衣が晴れる前に、少女の父親は拷問によって昏睡状態となり、命はあっても意識を一向に取り戻さない植物人間となってしまうた。

それから数日後に、真犯人が自白し、少女の濡れ衣は見事に晴れた。

しかし、少女の心の中は、掛け替えのない人をひどいめにあわされたということへの怒りが大きく、濡れ衣が晴れても何も嬉しく思えなかった。

もう、ロングシャドウを抜けよう。

少女は、そう考えた。

しかし、それではロングシャドウへの怒りを消す手段が失われてしまう。

少女は、その時にロングシャドウへの復讐を思い立ち、必ずロングシャドウを破滅に追い込んでやると、心に誓ったのだった。

そして、それから半年後の今日。

少女は、ロングシャドウへの復讐劇の幕を上げるべく、薄紅色の羽を掲げて立っていた。

「もう、私はあなたたちのためなんかに、不死鳥の研究をする気はありません。」

少女の言葉に、先ほど少女からチーフと呼ばれた中年の男が慌てて答える。

「それは、困る！キミが今ロングシャドウのために動いてくれなくなると、研究に支障をきたす。」

キミの存在は、ロングシャドウにとって実に多大なんだ。」

その言葉を聞いて、少女はほくそ笑む。

「だから、私はロングシャドウを脱退するんです。
あなたたちは、私がいないと何もできないからね。」

そう言って、少女は部屋を堂々とした足取りで立ち去った。

少女はこの半年間、死に物狂いで働いた。

ロングシャドウに利益になるように、必死で研究を続けた。

その結果、ロングシャドウは少女なしでは研究をできない、雑魚団体へと変化した。

それを、少女は狙っていたのだ。

それは、少女のけな気な復讐の序章だった。

少女は、未だ意識を取り戻さずに眠り続けている父を前にして、心の内を囁いた。

「父さん…。私、ロングシャドウを脱退したよ。これが、私のできる限りの復讐なの…。」

これから先、もっともっと頑張って不死鳥の研究を進めていって、ロングシャドウの奴らをギャフンと言わせてやるんだ。だから父さん、私のこと、見守っていてね…。」

少女は、父親の手を強く握り締めた。

しかし、ベッドで横たわる父親に反応はない。

少女は父親の傍らで、いつの間にか寝入ってしまった。

その胸元には、まだ先ほどの薄紅色の羽が光っていた。

No.1 彼女の序章（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。この作品は、あまり完成度は高くありません（汗）むしろ、至らぬ点をご指摘いただけるだけでも、喜ばしいことかと思っております。もしよろしかったら、今後もお読み頂けたら、幸いです。では、失礼いたします。

No.2 紅い青年

コルサットから少し離れた所にテグスターという小さな町があり、そこは町のほぼ全域が繁華街になっているためガラの悪い人間が多く、酔っ払い同士や裏社会の人間同士などのイザコザがよく巻き起こっていた。

町が最も賑やかになる夕方を迎え、テグスターは活気に溢れた夜の町へと変貌していた。

そんなテグスターの騒がしい道を、10代後半ぐらいの青年が酒を片手に歩いていた。

その顔立ちは整っていて、赤茶色の髪を持ち、瞳の色は光が当たると綺麗な紅色に輝いた。

女たちが次々に彼の方を振り返る。

しかし、青年はそんな目を気にも止めず、一直線に目的地を目指していた。

青年は、とあるレストランに足を踏み入れた。

レストランの戸を開けると、中から「いらっしやいませ」という元気の良い声が聞こえてくる。

青年は、レストランのカウンターの横にある階段を下りて、地下へ

と消えて行った。

どうやら、その店の従業員は皆、彼を知っているようだ。

その証拠に、地下に消えた青年を気に掛ける者は、誰一人としていない。

青年は、薄暗い階段をゆつくりと物静かに下って行く。

それは、まるで気配を消しているようだ。

青年は地下に辿り着くと、手探りで電気のスイッチを探した。

そして、パチッという音と共に、辺りは明るくなった。

すると、青年の目の前には銃を構えた男がいることが分かった。

その男は、青年の方に銃口を向けて、やや震えた様子でいる。

「あんたが、ブルースカイのリーダー？」

と、青年は、落ち着いた面持ちで銃を構える男に訊ねた。

「ああ、そうだよ！！お前は、例の殺し屋だろう！？」

俺を殺しに来た、噂の死神だろう！？」

その男が、震える声で叫んだ。

すると、青年はニコツと笑った。

「死神？俺って、陰じゃあ、そんな風に呼ばれてるんだ。」

青年は丈の長いコートを羽織っていた。

そして、おもむろにそのコートを少しめくった。

そのまま、やや姿勢を落とす、両拳を胸の前で構える。

それを見て、銃を持っている男が怯え始める。

「や、やめろ！！俺は、死にたくない！！」

男は、そう叫んだ瞬間に勢いで銃の引き金を引いた。

バーンッ！！という凄まじい銃声が地下内に響き渡った。

弾丸は、青年の胸を見事に貫通していった。

しかし、青年は倒れることなく、その場に立っている。

苦しんでいる様子もない。

「残念でした。」

そう言つて、青年は近くにあった棒を手にとると、男の首を後ろから強く殴打し、その首の骨を折って立ち去った。

去り際に、青年は手に持っていた酒をぐったりと倒れている男の傍らに置いて行った。

青年は階段を上って、再びレストランに現れた。

すると、カウンター越しに1人の美女が青年に話し掛ける。

「カイ。ご苦労様。」

「銃声、聞こえちゃった？」

美女にカイと呼ばれた青年が、頭をポリポリとかきながら言った。

「大丈夫よ。誰も気にしてないから。」

美女は、そう言ってカイにドリンクを手渡した。

それは酒ではなく、グレープフルーツジュースだった。

「サンキュー、ミキカ。」

そう言って、カイはグレープフルーツジュースを一気に飲み干した。

そして、カイはカウンターに腰掛けた。

その隣に、カイにミキカと呼ばれた美女が静かに腰掛けた。

「ねえ、カイ。本当にこの仕事辞めるつもりなの？辞めて、一体どうするつもり？」

「もう、辞めるって決めたんだ。今さらだけど、やっぱり人の命を奪うのは、良くないよ。」

俺も、ようやくそう思えるようになったわけ。

それに、これからは本格的に不死鳥の行方を捜すつもりだから、本気で旅にでるよ。」

カイは、やわらかな笑みを浮かべ、頼杖をつきながら言った。

「不死鳥を追って、どうするの？前からカイって不死鳥に興味持ってる感じしたけど、不老不死の伝説なんて信じてるわけじゃないわよね？」

ミキカが、馬鹿にしたような口調で言った。

すると、カイはミキカの瞳を見つめて、

「呪いを解く。」

と、一言残すと、カイはレストランを足早に立ち去った。

ミキカは、意味不明だと言わんばかりの表情で、カイを見送った。

No.2 紅い青年（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。第二話を投稿させていただきました。何かお気づきの点など、ございましたら、是非ご意見等お聞かせ願いたいです。今後もしよろしくお願い致します。では、失礼致します。

No.3 出会い

少女が目を覚ましたのは、月が空に現れた夜更けだった。

少女は窓の外をふと見た。

すると、コルサットの外れにある洋館の方に向かって歩く、1人の男を目撃した。

少女は不審に思い、その男の後を追った。

男は、洋館の前に辿り着くと、中を一心不乱に覗き込んでいる。

噂の洋館を見に来る人間は少なくないが、こんな夜更けに、しかも異様に興味津々な様子が一層怪しかった。少女は意を決して男に話し掛ける。

「あの……。」

その少女の声に、男は驚く様子は見せず、かえって喜んでいる様子がある。

「コルサットに住んでる人？」

男は、少女に訊ねた。

男は、不思議な瞳の色ではあるが、その端正な顔立ちには少女も目を奪われた。

「はい、そうですけど…。…ここで何してるんですか…？」

少女が、不審者を見る目で男を見つめながら言った。すると男は、

「この洋館って、もう誰も住んでないんだよね？」

夜の空気の中に不気味に浮かび上がる洋館を、見つめながら言った。

「今夜一晩だけでも、使わせてくれないかなあ？と思ってさ。」

男は、頭をガシガシとかきながら言った。その容貌には似合わない仕草だった。

「宿を探してるんですか？」

少女が訊ねた。すると、男は目を輝かせた。

「俺に宿、提供してくれんの？」

男は少女に近寄った。そして、満遍の笑みで、

「金は、ないよ。全部、飲み食いで使いきっちゃったから。」

と、少し悪びれる様子を見せながら言った。

少女は、そんな男と関わったことを後悔しつつも、悪人ではなさそうなの男に、一泊の宿を与えることにした。

少女は男を自分の家に案内した。

けて大きな家ではないが、父親の部屋と自分の部屋以外に、空いてる部屋が1つあったのだ。

そこを、男に今夜一晩だけ貸すことにした。

「ここ、あんまり広くないけど……。使ってください、野宿よりはマシでしょう?」

そう言つて、少女は男を部屋に案内して立ち去ろうとした。すると、

「ああ、あのさあ。」

男が少女を呼び止めた。

「何ですか?」

少女が面倒くさそうに男の方を振り返った。

「まだお互い、自己紹介してなかったよな。俺の名前はカイ。キミは?」

「私はサガミです。」

サガミは冴えない顔をして答えた。

しかし、カイは全く気にしていない。

一瞬の沈黙の後、

「ああ、そうだ。一つ訊いていいかな？」

「はい。」

サガミは、ため息まじりに答えた。

「不死鳥って知ってるかな？」

と、カイが訊ねた。

すると少女は、不死鳥という言葉聞いて表情を一変させる。

「あなたもしかして、不死鳥を追ってるの！？じゃあ、私と一緒にのね。何か、耳寄りの情報を持ってたりするの？」

サガミの表情は先ほどまでとは打って変わって、輝いていた。

カイも、そんなサガミの態度の変化に気が付いていないわけではないが、あえて問う気もなかった。

「耳寄りの情報を持ったら、コルサットなんかに来たりしねえよ。まだまだ、俺の不死鳥探しは手探り段階なんだよ。キミは、不死鳥には詳しいの？」

そのカイの言葉を聞いて、サガミは明らかにガツカリとした表情を浮かべた。

「あなたよりは詳しいかもしれない。」

「じゃあ、不死鳥を陰で徹底的に研究してるっていう、変な研究団体知ってる？名前は確か、……ロングシャドウって言ったかなあ？」

「よく知ってる。つい最近まで、ロングシャドウで研究員やってたから。」

そのサガミの言葉に、カイは驚いた様子を垣間見せながらも、どこか喜んでいるようにも見える。そして、

「元研究員だったんだ？じゃあ、不死鳥に関しては知らないことはないぐらい、詳しいわけだ？」

と、カイが腕を組みながら言った。するとサガミは、

「知らないことなんて、たくさんあるわよ。」

少しムツとしたような様子でいる。

「例えば？」

と言つて、カイは立ったままの姿勢で、窓際にもたれかかった。

「例えば？……、そうねえ、……例えば、不死鳥の寢床とか……。」

「寢床？俺、知ってるよ。不死鳥が、過去に寢床にしてた場所だったらだけど。」

と、カイが何食わぬ顔でサラリと言った。

サガミはカイに、食い掛かるような勢いで問う。

「本気で、言ってるの？冗談だったら、怒るわよ。」

「ああ、本気だよ。不死鳥は、1度見たことがあるし。」

カイは、またもやそのような事をサラリと言い放った。

サガミはかえって、不信感を抱いた。

「本当に……？」

疑いの眼差しで見つめてくるサガミに、カイは笑顔で応える。

「宿を与えてくれたお礼に、不死鳥の過去の寝床と、俺が知ってる限りの不死鳥の情報、キミに教えるよ。それだけじゃ、不服かもしれないけどね。」

男前のカイに満遍の笑みで言われて、サガミは思わずボーっとしてしまった。

「今すぐ教えて。不死鳥の寝床。」

「お安い御用です。」

そう言っただけでカイは、サガミから借りた部屋にある小さなテーブルに、懐から取り出した大きな世界地図を広げた。

「ここが、コルサット。」

カイがそう言っただけで指差したのは、世界地図のコルサットと記された

場所だった。

サガミは真剣な眼差しで、世界地図とカイの指を見つめている。

「大陸は大きく4つに分かれていて、シュンオウ大陸、カイオウ大陸、コウオウ大陸、トウオウ大陸って名前なのは勿論、知ってるよな？ちなみに、コルサットはシュンオウ大陸にある。そして、俺が不死鳥と会った場所は、ここ、ライクっていう国の深い森の中だ。」

そう言つて、カイはカイオウ大陸にあるライクという国を指差して言った。

「つまり、そこが不死鳥が過去に寢床にしていた場所ってこと？」

サガミが、カイの方を見て訊ねた。

「そう。不死鳥って、3年に1度の周期で寢床を変えてるのは知ってるよね？」

サガミは頷いた。

「俺が会った時期から計算していくと、ちょうど今年寢床を変えることが分かったんだ。」

「じゃあ、空を飛ぶ不死鳥を、もしかしたら目撃できるかもしれないってこと！？」

サガミの表情は、今まで以上に輝いている。

「まあ、うまくいけばね。それに、1度寢床に使った場所を二度と

寝床には使わないって、わけじゃないみたいだし、運が良ければライクの森の中で遭遇できるかもよ。」

「でもまさか、ごく最近に使ってた寝床を、今回また使おうなんて思わないんじゃない？」

サガミのその言葉に、カイが少し動揺を垣間見せた。しかし、

「まあ、そうだな。とにかく、不死鳥の過去の寝床はライクっていう国にある。」

と、自分が動揺しているのをサガミに悟られないように、カイは話を終わらせた。

「ロングシャドウは、世界一の規模の不死鳥研究団体だって聞いているけど、貴重な情報とか文献とか、けっこう持ってるんじゃないの？」

「まあ、他の小規模な団体に比べれば、価値の高い情報とか文献とかも、ある程度持ってたけど…。でも、大したことはないわ。」

「もう、脱退したとは言え、随分ロングシャドウに冷たいな？」

カイが、微かに笑みを浮かべながら言った。

「嫌いだから。ロングシャドウが。ただ、それだけ。」

「ふん。まあ、俺には関係ねえけど。」

2人の間に、軽い沈黙が過ぎる。

「そういえば、最初会った時からずっと気になってただけ。胸につけてる羽、それどこで手に入れたんだ？」

カイが沈黙を破って訊ねた。

「これ？これは、コルサットの森の中で見つけたの。私は、不死鳥の羽だと思うけど、検査してみないことには、はっきりとは分からないわ。」

サガミが、嬉しそうな表情で薄紅色の羽を胸元から外して、手の平にのせた。

「ちょっと、見せて。」

そう言つて、カイはサガミの方に手を差し伸べた。サガミは、素直にカイに羽を手渡した。

そして、カイは受け取った羽を丹念に、触り心地や色合い、羽の質などを調べている。

サガミは、その光景を黙って見つめている。

そして、カイは無言で羽をサガミに返した。

「これは、不死鳥の羽に間違いない。他の野鳥とは、羽の質感や光に当たった時の光沢の具合が、微妙に違うんだ。世の中には、こういう赤色っぽい羽を持つ鳥は、何種類かいるけど、この羽は不死鳥の落とした羽だと、ほぼ断言できる。」

カイは、真面目な表情で言った。

しかし、サガミは複雑な表情で応える。

「どうして、断言できるの？」

「見たことがあるからだよ。」

カイは、当然だろうと言わんばかりの顔で答えた。

「ちなみに、その羽が本物だと知れたら、本格的にいろんな不死鳥研究団体からオフアーが来たり、場合によっては攻撃も受けるかもしれないな。」

「オフアーが来ても応じないから、問題ないわ。それに、たかが研究団体の貧弱な攻撃からなら、自分で自分の身を守ることだって可能だし。」

サガミは、いたって強気だった。

その様子を見る限り、心配はなさそうだと、カイも思った。

「そういえば、ロングシャドウを抜けたってことは、不死鳥の研究は半ば諦めてる状態？」

「諦めてなんかないわよ。これからは、自分独りでのびのびと研究を進めていくつもりなの。事によっては、旅にだって出るつもり。」

「事によっては？団体抜けて自由の身なら、早速旅に出ればいいじゃない。」

そのカイの言葉を聞いて、サガミの表情は心なしか暗くなった。

「父さんを置いてなんていけないから、少なくとも今は、旅に出ることはないと思う。」

「親父さん、体悪いのか？」

「もう、半年前からずっと植物人間の状態で…。どうしたって、父さんを放ってはおけない。」

サガミの複雑な表情を見て、カイは何か考え込んでいる。そして、

「それなら、俺の知り合いの医者を紹介するよ。腕も確かだし、金が充分にないって言えば、無償で面倒もみてくれる。入院させれば、しっかり看護してくれるから、安心だと思うけど。」

と、サガミにとっては願ってもない提案だった。

「その人は、どこにいるの？すぐにでも会って話してみたい！」

サガミの表情が一気に明るくなった。

「実は、俺も居場所は知らないんだ。コルサツトの近くにあるテグスターのレストランにいる女が、病院の場所を知ってるんだ。一応、その女は俺の雇い主で、そいつがいつも俺に仕事を提供してくれるんだ。」

「カイは、いつもどんな仕事してるの？」

サガミのその言葉に、カイは悩む様子を見せた。そして、

「ゴミ処理業務。」

と、カイは口元に笑みを浮かべて答えた。

サガミは、カイの見た目とは似合わない仕事だと思い、不思議に感じていた。

「一応、ここに地図書いておくから。」

そう言つて、カイはテグスターにあるレストランへの道のりを地図に記した。

それを、カイがサガミに手渡した瞬間、部屋の窓を割つて、外から何かが家の中に投げ込まれた。

サガミは突然の出来事に困惑している。

「え！？何！？」

カイは、投げ込まれた物を拾い上げた。すると、

「げっ！！爆弾だぜ、これ！！！」

それが、時限式の爆弾だということに、カイは気が付いた。

サガミは、さらに動揺する。

「うそっ！！！？信じらんない！！何で、爆弾なんかがウチに放り投げられたのよ！！！？」

「落ち着け！これは、俺が処理してくる。お前は、ここで大人しく待ってる。いいな！？」

カイはそう言っ、爆弾を片手に割れた窓の外へと飛び出した。

サガミは、心配そうな眼差しでカイを見送った。

No. 3 出会い（後書き）

こんにちは。お読み頂きまして、ありがとうございます。今後とも
どうぞ、よろしくお願い致します。

No.4 不老不死

爆弾は、あと30秒で爆発する。

爆弾の側面にある時計が、それを教えてくれた。

カイは、急いでコルサットの森を目指した。

その爆弾が、どれほどの威力があるかは、全く分からない。

しかし、万が一強力な爆弾だったとしたら、コルサット全体が危険にさらされる。

そんなことを考えながら、カイは必死に走った。

ただ、カイはその間、自分の身を案ずるような様子は全くない。

カイは自分の身に危険が迫っているとは、全く思っていないのだ。

その理由は、彼の果てしない過去が物語る。

カイは以前、コルサットのあるシュンオウ大陸ではなく、カイオウ大陸に住んでいた。

カイは、両親を幼くして亡くし、母方の祖母の家で育てられた。

両親がいないという辛い現実にも負けず、カイは明るく活発な子どもだった。

また、他の子ども達と比べてカイは、幼いわりには思考能力が長けていて、優れた頭脳を持っていると周囲の噂になるほどだった。

そんなカイが、伝説の不死鳥に興味を持ち、不死鳥についての勉強を始めてみると、不死鳥の痕跡報告や目撃談、過去の偉人が記した不死鳥研究・調査の書物などを照らし合わせて、その居場所や寝床を突き止めるということは、そう困難なことではなかった。

不死鳥の居場所を突き止めた以上は、カイ自身も一目みたいと思うようになった。

そして、祖母の元を離れ、カイは18歳の時に一人、旅に出た。

不死鳥が居るであろうと自分で突き止めた、ライク国の森。

しかし近年、悪名高い殺し屋が出現したり、血に飢えた獣が増え始めたりして、この世界の治安は、確実に悪化していた。

そのため、森に辿り着くまでの道のり自体も非常に困難なものであることが予想された。

その上、辿り着いた森の中でも、危険な野獣などに襲われる可能性だつてある。

旅は、危険以外の何物でもなかった。

しかし、幼い頃から最低限の戦闘技術や護身術を身に付けることは、

世界の治安の悪化と共に、当然のこととして考えられていたし、それは義務に近かった。

危険が身近にある時だからこそ、自分の身は自分で護る。

それが鉄則、ということだったのだろう。

しかし、やはり危険が付き物の道中、万が一のことがあってはいけない、と心配した祖母から、カイは護身用の短剣を譲り受けた。

旅立つてから何ヶ月もの間、猛獣や夜盗などに襲われながらも、ライク国の森に隣接する小さな町に拠点を設け、森の中を気持ちの向くままに歩き回った。

しかし、一向に不死鳥らしきものの影すら見当たらない。

やがて、町に拠点を設けてから一年が経過し、もう一度初めから調べなおすべきなのか、と諦めかけた時だった。

森の中を歩き回っていたカイの頭上が突然暗くなったり明るくなったりし始めた。

それまで、深い森の中とはいえ、陽の光は途切れることなく注いでいた。

しかし、それが遮られる瞬間がある。

カイは、頭上を見上げた。

するとそこには、大きな赤い羽根を広げ、燃え上がる炎のような赤

の羽毛を身にまとった、神秘の鳥がいた。

それが、自分が捜していた不死鳥だと、カイは時間差で理解した。

その姿は、あまりに美しかった。

カイは、思わずその姿に見とれていた。

しかし、次の瞬間、不死鳥が思いもよらない行動を起こした。

不死鳥の真下でボーっとしているカイに、不死鳥が襲い掛かってきたのだ。

カイはとつさに懷から、忍ばせていた短剣を取り出した。

そして、自分の方に迫り来る不死鳥の腹を、短剣で思いっきり斬り付けた。

カイは、そのような行動を起こしてから、すぐに罪悪感を感じた。

カイが斬り付けた傷口から、不死鳥の血がドバッと噴き出した。

カイは、その大量の不死鳥の鮮血を全身に満遍なく浴びた。

カイの姿は、不死鳥の真っ赤な血で塗り潰され、すぐに体が熱くなってきた。

体の熱が恐ろしくなり、カイはその場を走って逃げた。

そして、森にある湖に勢い良く飛び込んだ。

湖の水で、全身についた不死鳥の血を、カイはキレイに洗い流そうとしたのだ。

しかし、服に染み付いた血は、全くとれなかった。

そして、カイは水面に揺れながら映る自分を見て、愕然とする。

カイはもともと、瞳は茶色で髪も茶色だった。

しかし、何故か不死鳥の血を浴びた今、瞳や髪の色素が一気に薄くなったのか、瞳も髪も赤みの強い色に変化していた。

カイは、驚きはしたものの、瞳や髪の色の変化くらいなら大したことではない、とショックを和らげようと、そう自分に言い聞かせた。

しかし、カイの体の変化はそれだけでは留まらなかった。

サガミの家に投げ込まれた爆弾を、カイはコルサットの森の中に投げた。

すると、爆弾は森の中で思ったよりも小規模な爆発を起こし、消滅した。

おそらく、何者かがサガミの家だけをターゲットにして作った、爆弾だったのであろう。

爆弾がうまく処理できて一安心しているカイの元に、見知らぬ男が姿を現した。

「余計なことをしてくれたな。」

そう言つて、謎の男はカイの元にゆっくりゆっくりと歩み寄ってくる。

カイはポケットに手を突っ込んだ。

「余計なこと？」

カイが、嫌味な聞き返し方をした。

「そうだ。あの爆弾は、サガミの家で見事に爆発する予定だったシロモノだ。それを、邪魔してくれただろう？だから、余計なことなんだ。」

「あんた、何者だ？」

「俺は、不死鳥研究団体ロングシャドウの一員だ。」

「ご苦労様です。」

カイは、ふざけた様子で謎の男に会釈した。

すると、謎の男は苛立ち始める。

「てめえこそ、何者だ？」

その、謎の男の質問に、カイは笑顔で応える。

「しがない、ただのゴミ処理業務員です。」

その言葉を聞いて、謎の男は高笑いしだす。

そして、

「目障りだ。死ね。」

謎の男は表情を一変させて、カイに銃を向けた。

カイは、それを見ても微動だにしない。

そして、謎の男はためらうことなく、カイに1発の銃弾を打ち込んだ。

それは、確かにカイの胸を貫いていった。

しかし、カイは撃たれた部分をポリポリと掻きながら、

「あ。やべえ。避けるの忘れてた。」

と、大げさに悔しがる様子を見せながら、おちゃらけて見せた。

謎の男は、カイのその様子を目の当たりにして、怯え出した。

「な、なんだ、お前！？化け物か！？」

謎の男は、そう言つて徐々に後ずさりしている。

カイは、ゆっくりと謎の男に歩み寄つた。

「確かに、化け物だよ。だって、俺今年で133歳になる、長寿人間だからね。」

と、カイは笑いながら言つた。

しかし、見るからにカイは133歳には見えない。

どう見ても、カイは10代後半の青年にしか見えない。

謎の男は、またカイがふざけているのかと思つた。

しかし、先ほど銃弾をくらつても微動だにしなかった彼の様子と、今の発言から考えると、

「お前まさか、不老不死なのか……！？あの、不死鳥に会つたことがあるっていうのか！？」

答えは、必然的にそうなつた。

するとカイは、これといった返答はせず、ただほのかな笑みを口元に浮かべている。

「そんなことは、どうでもいいんだ。あんな、サガミの家に爆弾投げ込んで、爆発させて、サガミやサガミの親父さんを殺して、一体どうするつもりだったんだ？」

目の前で青ざめている謎の男は、一呼吸置いてから口を開いた。

「サガミは、不死鳥の貴重な羽を所持している。それは、我々ロングシャドウの物になるべき物。ロングシャドウを裏切ったサガミには、消えてもらうつもりでいたのさ。」

「なるほど。つまり、ロングシャドウの皆さんは、サガミを忌み嫌ってるわけすな。」

カイが、真面目なのか不真面目なのか区別のつかない口調で言った。

「その通りだ。ところで、さっきの質問に答えてもらおうか。お前は、不死鳥に会ったことがあるのか？」

「ある、と言ったら？」

カイが、謎の男を探るように見つめた。

「ロングシャドウの研究所で、お前の身体的全組織のデータをとる。そして、本当に不老不死の体なのか調べる。そして、最終的にあなたが不老不死だと分かったら、我々ロングシャドウの一員として加わってもらう。」

謎の男の話を聞きながら、カイはずっと顔をしかめていた。

「じゃあ、ないってことにしてください。俺、男に体触られて喜ぶ人間じゃないし、ましてや陰気そうな研究団体に参加する気もないし。交渉決裂ということだ。」

そう言って、カイは謎の男に手を振った。

そんな間の抜けたようなカイの態度に、謎の男は苛立ってくる。

「俺を、馬鹿にしてんのか!？」

という、謎の男の叫びに、カイは振り向き、

「はい。」

と、笑顔で答えた。

そして、謎の男に背を向け、その場から立ち去ろうとした。

すると、謎の男は逆上して、無数の銃弾をカイの背中に撃ち込んだ。

しかし、カイはたくさんの銃弾を受けながらも、普通に歩いている。

謎の男は、その信じ難い光景に、腰を抜かした。

No.4 不老不死（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。どうやら、お読み頂いた方にご評価を頂くことができたようで、少しほっとしております。今後も、どうぞよろしくお願い致します。

No.5 変化

カイは、サガミの家に戻る前に、謎の男が撃ち込んだ銃弾を全てきれいに取り除いた。

服には多くの穴が空いているが、それは仕方ないのでそのままにすることにした。

カイが、サガミの家の戸をノックすると、中から気を張り詰めたサガミの声がする。

「誰：？」

「カイです。」

サガミは、戸の隙間からカイの姿を確認すると、カイを家の中に入れ、戸をしつかりと施錠した。

「爆弾、無事に処理できたの？」

「ああ、何の問題もなく処理できたよ。」

そのカイの言葉を聞いて、サガミは安堵の息を吐いた。

「あの爆弾、ロングシャドウの仕業なんですよ？」

サガミが、鋭い表情になった。

「よく分かったな。あの爆弾を家に投げ込んだ奴は、お前をロング

シャドウの裏切り者だと言ってたぜ。なんでも、お前が持つてる貴重な不死鳥の羽は、ロングシャドウが持つべき物だとか、そうじゃないとか。」

カイは、ふざけた言い回しではあるが、サガミに事実を忠実に伝えている。

そのカイの言葉を聞いて、サガミの表情は一気に険しくなった。

「そう、そんなこと言ってたんだ……。どこまでも、バカで救いようのない奴らね……。結局、奴らはこの家を爆破して、邪魔者を消し去って、ゆうゆうと羽を奪い取るつもりでいたってことね……。憎らしい……。」

「投げ込まれた爆弾は処理したけど、投げ込んだ張本人には特に手を出してないから、もしかしたらまた何か仕掛けてくるかもしれないな。」

カイが、心配して言っているのか、他人事と思って楽しんでいるのか、よく区別しにくい表情で言った。

するとサガミは、

「その時は、潰すまでよ。」

と、明らかに怒りの滲み出た瞳でつぶやいた。

カイは、サガミのその表情を見て、ロングシャドウとサガミとの間に、少なからず何か過去の因縁があるのだと悟った。

しかし、あえてカイは深く追求しなかった。

「爆弾に対して素早く対処してくれたこと、感謝してるわ。ありがとう。」

そう言っで、サガミはカイに深く頭を下げた。

すると、カイは表情を綻ばせ、

「やめてくれよ。俺は当然のことをしただけだぜ。」

と言っで、サガミの肩をポンポンと軽く叩いた。

その、カイの人間味に溢れた言葉を聞いて、サガミは胸の中で凍り付いていた部分が、微かに溶けていくような心持ちになった。

その時、サガミはカイの前で初めて自然な笑顔を浮かべた。

翌日、サガミは思わぬ出来事に遭遇した。

まだ早朝だというのに、家の中でサガミがドタバタと走り回っている音が響き、カイは目を覚ました。

そして、サガミから借りた部屋から出てみると、サガミは1人で慌てふためいているような様子で、家の中をグルグルと歩き回っている。

「どうした？何かあったのか？」

カイが、眠い目をこすりながらサガミに訊ねた。

すると、サガミはカイの方に勢い良く歩み寄った。

「大変なの。父さんが、目を覚ましたの！！」

サガミの瞳は潤んでいる。

「そうか、良かったなあ！」

カイが、満遍の笑みでサガミに言った。

すると、サガミの瞳から大粒の涙が流れ落ちた。

これまで、1人で父親の看病をしてきたサガミにとって、父親の回復は強く願っていたことだった。

そして、あまりに突然父親が目を覚ましたという現実を前にして、サガミは気が動転していたのだ。

さらに、サガミは長い間信頼していたロングシャドウの연구원たちから冷たい仕打ちを受け、拳句の果てには父親を植物状態にまでさせられた。

サガミに心優しくしてくれる人物など、周囲には存在し得なかった。しかし今、目の前にいる会って間もないカイは、曇りのない笑顔で

自分に心優しい言葉をかけてくれた。

それが、サガミにとって、嬉しくて嬉しくてたまらないことであった。

サガミは、父親のもとへ向かった。

「父さん、……父さん？」

そのサガミの声に、

「サガ、ミ……。おはよう。」

サガミの父は、穏やかな笑顔でサガミの瞳を見ている。

「良かった……。父さん、本当に……。良かった……！」

サガミは、父親の手を握り締め、そのぬくもりをかみ締めた。

カイは、その光景をドア越しに眺めると、静かに家を去って行った。

サガミが気付いた時には、カイの姿は家のどこにもなく、コルサツトのどこにもカイの姿は見当たらなかった。

サガミの心の中には、半分何も言わずに去って行ったカイへの不満と、もう半分は、自分ではよく分からない気持ちがあった。

それから数日後、父親の容態もだいぶ良くなり、意識もはっきりと
していて、回復の兆しが明確に見えてきていた。

爆弾の事件から、数日が経過したが、それ以来特にこれといった事
件は起こらず、サガミは父親と2人で穏やかな日々を送っていた。

その数日間での唯一の変化といえば、ロングシャドウが研究所を移
動したことぐらいだった。

もともと、ロングシャドウはコルサットの外れにある例の洋館を研
究所として使っていた。

それはロングシャドウの者しか知らないことだが、研究員が夜な夜
な研究所に姿を現す影を、コルサットの住人が「亡霊」と勘違いし
たのだった。

しかし、ロングシャドウの人間は、洋館に堂々と足を踏み入れてい
たわけではなかった。

洋館の近くにある林から、秘密の通路を使って洋館を出入りしてい
たのだ。

そして、通路を抜けた先にある鉄の扉のさらに先の、薄暗い石の階
段を上っていくと、そこは洋館の二階の一番右端の部屋に辿り着く
造りになっていた。

そのため、コルサットの住人が夜な夜な目撃していた「亡霊」の影
が現れる場所が、「洋館の二階の一番右端」と、特定されていたの
だ。

そこは、研究員たちがよく通る場所。

すなわち影を目撃されやすい場所であった。

コルサットの「亡霊」の噂は、ロングシャドウの研究所移動と同時にきれいさっぱり消え去った。

商人の声が響く賑やかなコルサットは、「亡霊」の噂が消えたら、より一層の賑わいを抱いていた。

サガミもまた、父親が植物人間から脱したという一つの幸福の中にいた。

しかし、そんなサガミの心の中には、モヤがあった。

サガミはずっとカイの事が忘れられないでいた。

特に理由もなく、サガミはカイの事が気になってしかたがなかった。

確かにカイは、容姿端麗で、程よく上背もあり、楽観的でユーモラスな様子であることから、一般的な目から見れば、間違いなく魅力的な人間だった。

しかし、サガミが気になっているのはそのような事ではなく、カイのどこか不思議な雰囲気や、全身にまとう不思議なオーラ、とにかく全てが不思議な存在であったということが、気になってしかたがなかった。

「サガミ、父さんに気兼ねなんてしないで、どこか出掛けてきたら

どうだ？父さんは、1人で平気だから。」

サガミの父親は、意識を取り戻してからは驚くほど回復が早く、今では杖を使えば1人で歩くことができるほどの状態にまでなっていた。

「でも、行きたい所なんてないし…。」

サガミが、苦笑いで答えた。

「行きたい所なんてなくて良いんだよ。父さんはただ、サガミに息抜きしてほしいんだ。ずっと父さんみたいな足手まといを抱えて、今まで大変な苦勞をしてきただろうと思う。もちろん、やりたいことも満足に出来なかっただろうと思う。父さんは、サガミにこれ以上の迷惑は掛けたくないんだ…。」

サガミは、父の言葉に返答する言葉が、なかなか見つけれなかった。

そして、

「私、父さんのこと足手まといだなんて思っただけよ。確かに、大変なことはあった。でも、それが苦勞だったなんて、私は思わない。絶対、思わないよ！」

サガミは、力強く父親に気持ちを伝えた。

しかし、「自分のやりたいことを満足に出来なかった」というのは、図星に近いものがあった。

サガミは、不死鳥研究をもつと根底まで追及したいと思っていた。

しかし、それを断念させたのは、他でもない父親の存在があったからだ。

父親に罪はない。

だから、サガミはそれを父親に素直に伝えることはしなかった。

結局、サガミは父親に押し切られて、1人で外出することとなった。

No.5 変化（後書き）

こんにちは。JOHNEYです。お読みいただきまして、ありがとうございます。今後も、どうぞよろしくお願い致します。

No.6 少女と美女

コルサットは、相変わらず騒がしいほどの賑わいに満ちていた。

これまで、サガミは落ち着いてコルサットの商店を見ることが少なかった分、賑やかな商店街をゆくりと目的もなくただ、歩いていた。

その間も、サガミはずっとカイについて考えていた。

カイは、一体どんな人物なのか。

何故、黙って去ってしまったのか。

サガミには、分からないことばかりだった。

その時に、サガミはふとカイのある言葉を思い出した。

それは、カイにいつも仕事を提供しているという、テグスターのレストランの女の子の話だ。

サガミは、カイからその女がいるレストランへの簡単な地図を受け取っていた。

もしかしたら、カイはそのレストランにいるかもしれない。

サガミは、そう思った。

そう思ってからサガミの行動は、実に早かった。

サガミは迷わず、コルサットの近くにある小さな町テグスターへと足を向けた。

テグスターはコルサットとは違い、別の賑わいに満ちていた。

サガミは少し、勢いでテグスターを訪れたことを後悔した。

しかし、サガミは純粹にカイに再び会うことを望んでいた。

カイが記した地図を頼りに、サガミは例のレストランへと辿り着いた。

無意味に緊張しつつ、サガミはレストランの扉を静かに開けた。

すると、入り口の目の前にあるカウンターで、ひと際目を引く美女とサガミは目が合った。

すると、美女はおもむろにサガミのもとへと歩み寄った。

そして、

「いらっしやいませ。初めての来店ですよね？」

眩しいほど綺麗な笑顔で、サガミに美女は訊ねた。

サガミは、ぎこちない笑顔で頷いた。

すると、その美女はサガミをカウンターへと案内した。

「どうぞ、そこにお掛けください。」

サガミは、素直に美女が指した先のイスに腰掛けた。

サガミは、カイに仕事を提供しているという女が、一体このレストランのどこにいるのかと、辺りをキョロキョロと見回した。

すると、

「誰かと待ち合わせですか？」

美女が、サガミにすかさず訊ねた。

サガミは、少し困った表情で、

「えー？ いや、待ち合わせとかじゃないんです……。あの、…力
伊って人、ご存知ですか…？」

そのサガミの質問に、美女は微妙に驚いたような表情を浮かべている。

そして、

「あなた、カイの知り合い？」

サガミは、美女の口から願ってもない言葉を聞いた。

「え…？あの、もしかして、あなたがカイに仕事を紹介してるって人ですか？」

「仕事を紹介？……、ああ、まあ、そういうことになるかしら。もしかして、私を捜してたの？」

「はい。実は、あなたに訊きたいことがあるんです。」

「訊きたいこと？何かしら？」

美女は、穏やかな笑顔を浮かべている。

サガミは、カイのことを訊ねるつもりでここへ訪れたが、とりあえず本来その美女に訊ねるべき質問からしてみた。

「えっと、あのぉ……、私の父が、半年間植物状態だったんですが、それを最近脱することができました……。でも、この先いつまた再発するとも分からないので、名医と言われているお医者さんをあなたに紹介してほしいんです。あなたなら、その名医の居場所をご存知だと、カイから聞きました。」

そのサガミの言葉を聞いて、美女はしばらく考えている様子だった。

「そう、分かった。すぐにでも、紹介するわ。」

サガミは、美女の言葉を聞いて、喜びと安心をかみ締めた。

「あ、あの……。あと、もう1つ訊いていいですか？」

サガミが、慌てて言った。

すると、美女は迷わず頷いた。

「カイが、今どこにいるかご存知ですか…？」

「ごめんなさいね、それは分からないの。カイって、自由奔放な鳥のように、知らないうちに遠くにいたり、気付いたらいつの間にか近くにいたり、不思議な奴だから。常に居場所を把握するのは、難しいの…。」

美女の返答は、予想外に早かった。

「…、そうですか…。」

サガミは率直に、落胆した。

「で、その名医の居場所についてなんだけど。」

サガミの落胆ぶりを目にしつつも、美女は早速本題へと進んだ。

「あ、はい。」

サガミはすかさず応えた。

「その名医の名はカーザ。ここから北に行った先にある、シオンっていう町に今はいるの。でも、近いうちに別の町に越すって言うてたから、なるべく早く訪ねた方がいいわよ。」

「シオンって、大きな港町のことですよね？」

サガミが美女に訊ねた。

「そうよ。その漁港の近くにある白い建物の二階に、彼は居るわ。」

そして、美女は突然、何か思いついたような表情を見せた。

「ちょっと、待ってて！すぐに戻るから。」

そう言っ、美女はその場を離れ、カウンターの横にある階段を足早に下って行った。

そして、何分と経たないうちに、サガミの前に戻って来た。

そして、

「これをカーザに見せるといいわ。」

と言っ、美女はシルバーの小さな星の飾りがついたネックレスを、サガミに差し出した。

サガミはそれを素直に受け取り、

「ありがとうございます。」

と、深く頭を下げた。

「今日は、突然押しかけて、お騒がせしました…。」

と言って、サガミは美女に再び頭を下げると、レストランを後にしようとした。

すると、

「ねえ。」

美女がサガミをとっさに呼び止めた。

サガミは、ゆっくりと振りかえる。

「カイに会いたい？」

「え……？」

美女のその思いがけない質問に、サガミは言葉に詰まる。

「カイに会いたければ、またここへ来るといいわ。」

美女はそう言い残すと、カウンターの横の階段を下りていった。

サガミは、しばらくその場に立ち尽くし、考え込んでしまった。

テグスターのレストランを後にし、サガミはコルサットに戻って来た。

美女の最後の質問に、サガミは正直困った。

カイにはもう一度会いたいとは、確かに思っていた。

しかし、美女の「会いたい」かの質問の中には、何か別の要素が含まれているようで、安易な気持ちではYESともNOとも答えられなかった。

ただ、サガミは確かにカイに会いたいと思っていた。

コルサットの自分の家に戻り、サガミはおもむろにリビングのイスに腰掛けた。

すると、そこには置手紙が一枚置かれていた。その内容を見た瞬間、サガミは勢い良く立ち上がった。

「何、これ……!？」

サガミが見た置手紙には、こう記されていた。

「不死鳥の羽を3日以内にシオンの港まで持って来い。さもないと、お前の父親は亡き者になると思え。」

そして、その文末には「ロングシャドウ」と記されていた。

サガミは、歯を食いしばった。

そして、手紙を破り捨て、怒りに満ちた表情で家を飛び出していった。

取り引き場所は、奇しくもサガミが名医を訪ねようとしていた町であつた。

No.6 少女と美女（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。
お読み頂きまして、ありがとうございます。
今後もうござ、よろしくお願い致します。

No.7 これから

サガミが去った後のテグスターのレストランに、カイは現れた。

「ミキカ、俺はもうこの仕事から足を洗うって言っただろう!？」

レストランに入るなり、カイはカウンターにいるミキカに勢い良く詰め寄った。

するとミキカは怯える様子も悪びれる様子も見せずに、

「だから、何？」

と、あっさりと答えてみせた。

すると、カイは逆上するでもなく、フウっとため息をつくど、ミキカの目の前のカウンターのイスにドカッと腰掛けた。

「いいか、ミキカ。俺はもう、残酷な人間ではいたくないと思ってるんだ。これ以上、他人の血で自分の手を汚すようなことは、したくないんだよ。」

そのカイの言葉に、

「じゃあ、なんでこれまで私に協力してきたの!?! 変な偽善か何か!？」

と、ミキカがカイに怒鳴り返した。

レストランの客たちが、二人を凝視している。

「俺はお前の役に立ちたかったんだ。だから、お前からすれば、俺のしたことを偽善だと思っても仕方がない。でも、少なくとも俺自身は、お前に偽善をしたなんて思っていない。」

カイは、ミキカをなだめるような口調で言った。

「じゃあ、何で突然私を見放すの……？ 私はまだ、カイの力が必要よ……。」

ミキカは落ち着いてはいるが、気持ちの高まりがこもったような震える声で言った。

「……、お前は、この先もこれまでと同じように過ごしていくのか……？」

そのカイの質問に、ミキカは一瞬黙り込み、

「……。……、そうせざるを得ないの……。」

と、つぶやくような声で答えた。

カイは返す言葉が見つからなかった。

ミキカに何と云えば良いのか考えていた。

「……、まあ、いいわ。」

ミキカが浅いため息の後に言った。

「無理に繋ぎとめるのなんて格好悪いし……。説得してまで続けさせるべき仕事でもないし……。潔く諦めるわ……。」

ミキカは、とても潔く諦めたとは思えないような表情で、しかし淡々とした口調で言った。

カイは、目を合わせないように微かにうつむいているミキカを、複雑な表情で見つめている。

すると、

「……………、もう行つて。お客さんが見てるから。」

ミキカは棒読みのセリフのようにカイに言った。

カイは、静かにイスから立ち上がると、一度もミキカの方を振り返ることなく、店を後にした。

そのカイの後ろ姿を見届けたミキカは、無言でグラスを洗い始めた。

カイは、ミキカのレストランを後にしてから、テグスターの町をあてもなくただフラフラと歩いていった。

そして、その途中でズボンのポケットから、茶封筒を取り出した。

その封はまだ切られていない。

封筒のあて先には、「Mr・Kai」と記されており、差出人は「E・M i k i k a」となっている。

カイはその場に立ち止まると、その封筒を開けた。

すると、その中には一枚の紙が入っている。

その紙を見たカイは、テグスターの裏通りにある古びたバーへと足を向けた。

バーに入るとカウンター席から、火のついていないタバコを啜えながら、店に入って来たカイを手招きしている男がいる。

カイは、その男の横の席についた。

「遅かったな。」

男は、イスに座ったカイにすかさず言った。

しかし、カイはその言葉には特に応えずに、「いつもの」とバーテンに言った。

男がカイの方へ、カウンターテーブルの上で裏返しに伏せた写真と紙をスツと渡した。

しかし、カイはそれを手で止める。

カイのその行動に、男の目が鋭くなる。

「何のつもりだ…？」

男が言った。

それと同時に、カイの目の前にバーテンがグレープフルーツジュースを差し出した。

「あんたの思ってた通りだよ。」

そう言っ、て、カイがグレープフルーツジュースを一口飲んだ。

「じゃあ、この仕事を断ろうってわけか…？」

男がタバコに火をつけた。

カイが口元に笑みを浮かべた。

「ミキカには、もう言ってきたよ。もう、足を洗うってね。」

そう言っ、て、カイは男の胸ポケットからタバコを取り出すと、それに火をつけた。

「はははははははっ！！！！」

男が大笑いしながら、タバコの煙を吐き出している。

「カイ、笑わせてくれるじゃねえか。今日のは格段につける冗談だ。」

カイは、フウ〜っとタバコの煙を吐くと、

「冗談じゃないよ。本気さ。」

と、灰皿にタバコの灰をポンポンっと落とした。

一時の間のもと、男がタバコを灰皿に押し付けた。

「いいか、カイ。これだけはよく覚えておけ。お前は、この世界から足を洗ってのうのうと表社会で生きていくつもりでいるかもしれないが、…それは、俺たちへの裏切りだ。お前を俺たちに紹介したミキカは、当然、死をもつて償うことになる。それでも、お前はそんなバカなことを言うつもりか…？」

「……、それは、困るな。」

カイは、確かに男に脅されているが、言葉に緊張感がない。

「何で、ミキカが死ななきゃなんないんだ？ 抜けるって言ってるのは俺なんだから、俺を殺せばいいじゃん。」

その言葉に、男はフツと笑った。

「そんなに、ミキカが大事か、カイ？ ……いいだろう。ミキカの命は奪わない。それは約束しよう。そのかわり、お前の命はないものと思え。いいな？」

「ああ、いいよ。」

カイはそう言って、タバコを灰皿に押し付けた。

すると男が、

「ただ、条件がある。」

と、グレープフルーツジュースに手を伸ばしたカイに言った。

「条件？」

「そんなにミキ力が大事なら、ミキ力が最後にお前に与えた仕事くらい、片付けて、逝け。」

カイは、小さくため息をついた。

「分かったよ。」

そう言って、カイは、男が差し出した写真と紙を受け取り、ズボンのポケットにしまった。

そして、グレープフルーツジュースを一気に飲み干し、その代金をテーブルに無造作に置くと、席を立った。

「じゃあな、カイ。もう会うことはないだろうよ。」

その男の声に、

「そのタバコ、不味いな。」

と、カイは顔をしかめて応えると、店を出て行った。

男はそのカイの言葉に、先ほどよりさらに大きな笑い声を上げていた。

バーを出てすぐに、カイは男から受け取った紙をポケットから取り出し見た。

すると、カイの足はその場に張り付いたように、動かなくなった。

そして、おもむろにポケットから写真を取り出した。

そこには、カイには見覚えのある顔があった。

カイは、しばらくその場で考え込んだ後、足早に動き出した。

No.7 これから(後書き)

こんにちは。作者のJOHNEYです。本日二度目の投稿です。お読み頂きまして、ありがとうございます。これからもどうぞ、よろしくお願い致します。

No.8 これから・・・

コルサットの船着場から出航した船の中に、サガミはいた。

港町シオンまでは、コルサットから出ている定期船で向かうことにしたのだ。

サガミの瞳には、怒りが滲み出ていた。その拳は、強く握られている。

シオンには、翌日の午後到着する予定だ。

テグスターのミキカのレストランは、ディナータイムを過ごすべく来店する客で、忙しさを増していた。

店の従業員は慌ただしく走り回っている。

そこへ、一人の男が来店する。

「いらっしやいませ。」

従業員が応対に向かった。

しかし、すぐにミキカの方へとその従業員が駆け寄ってきた。

「ミキカさん。あちらの方が、ミキカさんとお話があるとのことなんです。」

「この忙しい時に、一体誰？」

ミキカはチラッと男の方を見た。

すると、男はミキカの方を見て、右手を挙げている。

ミキカは、ハツとした表情を浮かべると、

「悪いけど、私はここを外すわ。もし手が回りきらなくなったら、呼んで。」

と従業員に告げると、男の方へと駆け寄っていった。

「何か、用？」

ミキカが、右手を挙げていた男に露骨に嫌そうな表情で言った。

「そんな顔したら、美人が台無しだな。お前の顔が見たくなって来ただけだ。」

「ふざけないで！」

ミキカが男の言葉に小さく怒鳴った。

「ははははははっ！そんなに怒るなよ。冗談だ、冗談。カイのことでお前に伝えておきたいことがあったんだ。」

「カイのことで・・・？」

「おいおい、このまま立ち話させる気か？」

その男の言葉に、ミキ力は小さくため息をつく。カウンター横の階段を下りた先にある地下の部屋へと、男を案内した。

そして、部屋へ入るなり、

「それで、カイのことで何を言いたいのか？」

ミキ力は、強い口調で言った。

「さっき、いつものバーでカイと落ち合った。」

「そう。」

「そしたら、カイの奴、何て言ったと思う？」

「さあ。」

「この世界から足を洗うって言い出しやがってよお。しかも、それはお前に、もう伝えてあるとか言ってた。」

そう言って、男はタバコを取り出して火をつけた。

「ちょっと！ここ、禁煙なんだけど。」

「ああ、悪い悪い。忘れてた。」

男は素直にタバコの火を消した。

「確かに、カイから聞いてるわ。もう、他人の血で自分の手を汚したくないんだって。そんな奇麗事言ってるような奴に、これ以上協力してもらってもリスクを抱えるだけだわ。」

「はははははははっ！」

男は笑い出した。

「何がおかしいの!？」

「いやあ、これは見事なカイの片思いだなあ、と思ってよあ。」

「片思い?何の話よ。」

「まあ、良いんだ。お前がそういう気持ちでいるなら、話は早い。」

男はミキカの瞳を覗き込んだ。

「お前に、指令を出す。「カイを殺せ」。」

そう言つて、男は部屋を出て行つた。

ミキカは、すかさず男を追いかけ、

「ちょっと待って、ダング！」

叫ぶように男を呼び止めた。

すると、男はミキカを振り返る。

「簡単だ。お前が色目使えば、カイなんてイチコロ。一瞬で終わる。」

その男の言葉に、ミキカは呆然と立ち尽くした。

コルサットから出た定期船は、シオンの港に横付けされた。

サガミは急いで下船すると、港を一心不乱に見渡した。

取引のためにサガミを待っているであろう、ロングシャドウの人間を探しているのだ。

しかし、それらしい人間は見当たらない。しかし、サガミは思わぬ人物を目にする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・カイ・・・・？」

サガミが、目をこらして見ている先にいる人物が、サガミに気が付くと、歩み寄ってきた。

確かにそれは、カイだった。

するとカイは、

「まさか、こんな所で会うとは思わなかったなあ。親父さんは、その後どうだ？」

と、万遍の笑みで言った。

すると、もともと暗かったサガミの表情は、一層暗くなった。

しかし、

「何なの、あんた！？いきなりいなくなるなんて、無礼だと思わないわけ！？」

一気に顔を上げると、サガミはカイに詰め寄ってきた。

その表情は実に荒い。

「そんなに、怒るなよ。・・・その節はお世話になりました。」

と言って、カイはサガミに会釈した。

しかし、どこかちゃかされているようでサガミは不愉快だった。

「・・・・・・、もう、いい！あんたと話してると疲れる！」

「おいおい、ちょっと待てって！」

その場を離れようとしたサガミを、カイがすかさず呼び止めた。

「お前、何でこんな所にいるんだ？」

そのカイの質問に、サガミはうつむいた。

そして、何も答えようとしない。

「親父さんも一緒なのか？」

カイの質問に対し、サガミの口が動く様子がない。

カイは、フウッと微かなため息を吐いた。

すると、サガミは突然ハツとした表情になり、

「あんたには、関係ない。」

と、カイに眩くと、突然走って行ってしまった。

「え？おいっ！」

カイの声は、サガミには聞こえなかった。

No. 8 これから・・・（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。お読み頂きまして、ありがとうございます。今後もよろしくお願い致します。

No.9 罌

息を切らしたサガミが立ち止まったのは、シオンの港に並ぶ建物の路地裏だった。

「何で、逃げるの？」

サガミが大きく息を吸い込んでから言った。

そのサガミの言葉に、険しい表情の男がにらみをきかす。

「父さんは、どこ？」

サガミは大きく一步、前に出た。

「さあな。俺は知らねえよ。それより、羽は持ってきたんだろうな・・・？」

男の態度に、サガミはイラつきを覚える。

「父さんの無事が分かるまでは、羽は渡さない。」

「ふざけるなっ！羽が先だ！渡せ！！」

男は、サガミの胸ぐらを鷲掴みにして怒鳴った。

「ふざけてるのはそっちだっ！父さんを返せ！！」

サガミは、男の胸ぐらを鷲掴み、怒鳴り返した。

すると、逆上した男が懷から銃を取り出し、その銃口をサガミの額にあてがった。

サガミは、男の胸ぐらから手を離し、齒を食いしばった。

「なめんなよ、くそアマ！」

「私を殺せば、羽は手に入らないけど、いいの・・・？」

「なんだとっ！？」

男は、サガミの額に当てている銃口を強く押し付けた。

サガミの表情が歪む。

「私が今、羽を所持しているとは限らないでしょ・・・？どこかに隠しているかも・・・」

そのサガミの言葉を遮るように、サガミの背後から声がする。

「その心配はない。身包みはがして確認するまでだ。」

どうやらサガミの目の前にいる男は、自分の仲間たちがいるこの路地裏へとサガミをおびき寄せる役目をしていたようだった。

サガミは、自分の行動の軽薄さに後悔した。

よく見れば、敵は全部で5人いる。

明らかにサガミにとっては不利な状況だった。

どうしようかと、頭の中で思考を巡らせているが、一向に名案が浮かばない。

「大人しくしていれば、命までは奪わない。」

その男の言葉を聞いた瞬間、サガミは背筋に悪寒のような寒気を感じた。

しかし、それは怯えからくるものではなく、心の底から嫌気を起こしているのだ。

もちろん、サガミが言われた通りに大人しくなど、しているわけがなかった。

サガミは、背後にいる男が伸ばしてきた右腕を両手で瞬時に掴むと、目の前で銃を持っている

男に向かって、背後の男を投げ飛ばした。

その間にその場を逃れようとしたサガミだったが、別の男の容赦ないパンチが飛んできた。

それをまともにくらってフラついたサガミに、もう一度男の拳が飛んでくる。

しかし、それはサガミに当たらなかった。

再び殴られることを覚悟して目を閉じたサガミだったが、覚悟した

はずのパンチが飛んでこない。

サガミは恐る恐る目を開けた。

すると、パンチしようとした男の腕を誰かが後ろから掴んでいる。

「サガミ、こんな所にいたのかよ。いきなり走って行っちゃうから、何かと思うだろう。」

そこにいたのは、サガミの危機的状況を知ってか知らずか現れた力イだった。

サガミは、思わぬ救いの手に、ただ啞然としている。

「何だ、てめえはっ！？邪魔立てすると、ぶっ殺すぞっ！」

カイに腕を掴まれている男が、凄い剣幕で怒鳴った。

しかしカイは、

「こんな人気のない所にいるから、チンピラに絡まれるんだぞ。」

男のことは、完全に無視している。

そんなカイの態度に、男は顔を真っ赤にして逆上する。

「てめえ……！！俺をバカにしゃがってっ！」

そう叫びながら、男はカイに掴まれた腕をほどくと、素早くカイのみぞおち目掛けて拳を下から振り上げた。

しかし、その拳をカイはいとも簡単に左手で受け止めると、

「あんた、うるさいよ。」

と言って、その掴んだ男の拳で、男の顔面を殴りつけた。

男は、鼻血を出しながら、その場にへたり込んだ。

それを合図にするかのように、他の男たちもカイに立ち向かって来た。

しかし、彼らもまるでカイに弄ばれるかのようにして、倒されていた。

そして、カイとサガミの目の前には、銃を持っている男一人となった。

すると、

「あ！」

カイが、その男を指差して叫んだ。

「あんた、どこかで会わなかったか？」

その、カイの言葉に、

「お、お前は、あの時のバ……」

と、男が反応したが、その口をカイは素早く塞ぎ、その手から拳銃を取り上げると、

「しいいっ!」

と、人差し指を口元に立てて笑顔を浮かべた。

「思い出したよ。この間、サガミの家に爆弾投げ込んだ奴だ、こいつ。」

男の口を塞ぎながら、カイはサガミに言った。

「こいつが、そうなの!」

サガミは、抜けていた気を一瞬で取り戻すと、ドスドスと音が出るくらいの迫力の足取りで、カイに口を塞がれた男の前に歩み寄った。

男は、そのサガミの迫力にひどく怯えている。

「お前・・・!ただで済むと思うなよっ!」

そう言つて、サガミは男の腹を勢い良く蹴り上げた。

男は低い声で唸る。

「父さんは、どこなの!早く、答える!」

そのサガミの圧倒的な迫力に、男はうんうんと頷いている。

カイが、それを見て男の口から手をどけた。

「カ、カーザっていう医者所だ！……お、俺は、ここにサガミをおびき寄せるように言われただけなんだ！だから、許してくれ！あの爆弾だって、俺が考えてやったことじゃねえ！！俺は命令されてやっただけだ！本当だ！！」

男の瞳は必死だった。

とても偽りを述べているようには見えない。

その瞬間、パーンツ！！という破裂音が響いた。

辺りを見渡しても、人影がない。

「ちょ、ちょっと！！どうしたの！？」

サガミが叫んだ。

破裂音の後に、男が目を見開いてその場につつ伏せに倒れこんだのだ。

その口からは血が流れ出ている。

「う、うそ！何なのこれは……！？」

「誰かに撃たれたみたいだ。」

カイが、男の体を起こしながら言った。

その表情は、今まで見たことのないような真面目なものだった。

「死んじゃったの・・・？」

サガミが、カイに恐る恐る訊ねた。

すると、

「・・・ああ、もう息をしてない。」

カイは神妙な面持ちで答えた。

サガミの顔は一気に青ざめた。

「とりあえず、この場を離れたほうが良いな。」

と、カイが言った瞬間、どこからともなく銃弾が二人に浴びせられた。

地面に当たった銃弾が、砂煙を起こす。

サガミをとっさに護っていたカイが、

「サガミ、走れ！」

と叫ぶと、サガミの腕を引いて走り出した。

二人は、全力疾走でその場を離れ、なんとか難を逃れた。

No.9 毘（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。投稿が少し滞りがちで申し訳ありません・・・この後も、少しお時間頂くことになるかもしれませんが、どうか見放さずをお願い致します（汗）

No.10 再会

「さっきのは、一体何だったの・・・!?!」

サガミが、逃げて来たシオンの港で、上がった息を整えながら言った。

「さあな。たぶん、あの男と同じように消そうとしたんだろうな。」

「消す!? 何で!?!」

サガミが、明らかに驚いた様子で言った。

「・・・・・・、さあ?」

口元に微かな笑みを浮かべながら、カイは首をかしげた。

「あ、そうだ。「何で?」と言えば、サガミ、さっき何であの男に親父さんの居場所を訊いてたんだ?」

カイが、とぼけた表情で言った。

「え? ああ、あれね・・・。実は、・・・・・・ロングシャドウの奴らに連れ去られたの・・・。返してほしければ、羽をよこせてさ。」

「へえ。また、汚いことをするねえ。じゃあ、すぐ親父さん迎えに行ったほうが良いかもな。」

そのカイの言葉に、サガミが何故？という表情をした。

「取引が成立しなかったんだから、親父さんに危害が加わってもおかしくないだろう？」

カイは、明らかに他人事だと思っっている素振りである。

特に一大事とは、思っていないようだ。

「早く、カーザっていう医者を探さなきゃっ！！」

サガミの表情が一変して、うろたえ始めた。

「そういえば、カーザって名前、どこかで聞いたことあるなあ・・・」

カイが、遠くを見ながらアゴに手を当てて考えている。

「あ！！レストランの女の人に紹介してもらった医師の名前と同じだ！！」

サガミが、カイの大きな独り言に反応した。

そして、サガミは港で一軒だけ白い壁の建物を見つけると、一目散に走って向かった。

サガミは、三階建ての建物の二階に階段で勢い良く駆け上った。

そして、二階の部屋の戸をノックもせずに勢い良く開け放った。

すると、

「わぁあっ！！何だ！？何だ！？」

中にいた白衣の男が、大袈裟なほどの驚きぶりで、薬品を床にぶちまけた。

「何だ、キミは！？ノックもせずに入ってくるなんて、失礼だぞ！！」

白衣の男は、床で小さな池をつくっている薬品を雑巾で拭きながら言った。

「あ、あの、・・・ごめんなさい・・・。」

サガミが、我に返ったように、小さくなった。

「それで、何か、用かい？」

白衣の男のその言葉に、

「私の父が、こちらに来ていませんか！？」

サガミが、掴みかかるような勢いで白衣の男に迫った。

「キ、キミのお父さん？さあ？・・・、ただ、先日ここに連

れてこられた中年の男性だったら入院してるけど、その人がそんなのかな？」

「きっと、そうです！その人に会わせてください！！」

そのサガミの言葉に「どうぞ」と白衣の男が答えると部屋の奥から、

「その声は、サガミか・・・？」

杖をついた中年の男が現れた。

「・・・・・・・・！！？父さん！！！！」

サガミは、父親に駆け寄ると、その体を強く抱きしめた。

その感動の再会の場に、一足遅れでカイが到着した。

「良かった。無事だったみたいだな。」

カイが、小さく安堵の息を吐いた。

すると、

「あれ？カイ？」

白衣の男が、カイの顔をまじまじと見て言った。

「・・・・？カーザって、やっぱりあんなのことだったのか。」

どうやら、カイと白衣の男もといカーザは、顔見知りのようだ。

二人は笑顔で握手した。

サガミは、父親と二人で建物の屋上で談笑していた。

その間にカイは、カーザに少し話そうと言われ、部屋でカーザと机を囲んで話し始めた。

「ミキカは、元気にしてるか？」

カーザの最初の質問は、それからだった。

「ああ。変わらないよ。」

「何年ぶりに会ったっけ？」

そのカーザの質問に、カイが少し考えた後、

「確か、・・・・・・・・一年か二年くらいじゃないか？」

と、カーザから目をそらして答えた。

「そうか。もう、そんなに経つか。・・・・・・・・、カイ、お前は変わらないな。」

カーザが一直線にカイを見ながら言った。

その瞳には、どこか鋭さがある。

「たかが、一年や二年で、変わらないだろう？　そう言うあんたこそ変わってないじゃん。」

カイが、苦笑いを浮かべて言った。

「俺をバカにしてもらっちゃ困るな、カイ。俺が言ってるのは、そう言う意味じゃないんだ。」

「じゃあ、どういう意味だよ？」

少し不機嫌そうに聞き返したカイに対して、

「じゃあ、唐突に質問しても良いか？」

カーザが意味深に言った。それに、カイは複雑な表情で小さく頷いた。

「お前は、不老不死なのか？」

そのカーザの質問に、カイは黙り込んだ。

部屋の壁に掛けてある時計の針が動く音だけが聞こえる。

「何で、そう思っただ？」

カイが質問し返した。

「勘かな？」

カーザがイタズラ小僧のような顔で笑ってみせた。

するとカイは、

「何で、分かったんだ？」

不思議そうな表情で訊ねた。

「勘だよ。」

カーザは、再びイタズラ小僧のように笑ってみせた。

しかし、その答えに満足していない様子のカイを見て、

「半分は勘だけど、実は、もう一人不老不死の奴を知っててね。それで、もしかしたらと思ったんだよ。」

イタズラ小僧の中に微かな真面目さを出した笑顔で言った。

「なるほど……。まいったね……。今まで関わった人間には、誰一人として気付かれないように配慮してきてただけだなあ。」

カイが、苦笑いを浮かべながら頭をガシガシと掻いた。

「あはははは！ 気にするなよ！ 俺は、誰にも言わないから。」

カーザがそう言った次の瞬間、部屋の戸がゆっくりと開いた。

カイとカーザは、そちらを振り返った。

そこには一人の男が立っている。

「随分、楽しそうにお話しているところ悪いけど、お邪魔するよ。」

「急患ですか？」

カーザがその男の方へ駆け寄ろうとしたのを、カイが即座に腕で制した。

「何で、あんたがここにいるんだ？」

カイが、その男に言った。

「あれ？カイじゃねえか。お前こそ何でこんな所にいんだよ？」

それは、先日テグスターのバーで会った、ダングという男だった。

「何だ、知り合いか？」

カーザのその言葉に、カイはただ、頷いてみせた。

「今日は、お前に用はないんだ。」

そう言つて、カーザの方に歩み寄るダングの肩をカイは掴んだ。

「あんたの言う「用」っていうのは、あんまり良い予感がしないんだけどな。」

そのカイの言葉に、

「気のせいだろ？」

ダングは、カイの手を力強く払って応えた。

「カーザさん、あなたが保有している「例の物」を受け取りに来たんだが。」

そのダングの言葉に、カーザの表情が突然険しくなった。

「何だ、何かと思えば、あんたもアレが目的で来たのか……。悪いが、アレは誰にも渡せない。俺の切り札なんだよ。」

カイは、二人のやりとりを複雑な表情で見つめている。

「仕方ないな。」

そう言って、ダングは小さくため息を吐いた。

そして、懷から鋭い短刀を取り出した。

それを見ていたカイが、すかさずダングとカーザの間に入った。

しかし、ダングはそれを予測していたのか、ためらうことなくその短刀の刃を深々とカイの横腹に突き立てた。

ザクっという鈍い音の後、カイが表情を歪め、唸り声を出しながら、その場に落ち伏せた。

「カイっ!？」

カーザが慌てた表情で、倒れているカイの体を起こした。

「いいか、カーザ。こうなりたくなかったら、さっさとアレを我々に渡すことだな。」

そして、

「いつけねえ!ミキカの仕事を奪っちまったじゃねえか!」

ダングは、何か思い出したような表情を浮かべて、うなだれた。

それを見ていたカイは、

「ダング。こんなんでも、俺を殺せたと思うなよ。」

と、苦痛に顔を歪ませながら言った。

するとダングは、一度鼻で笑った後、

「負け犬が吠えているようにしか見えないぜ、カイ。」

と吐き捨て、憎たらしい笑顔でその場を去って行った。

No.10 再会（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。お読み頂きましてありがとうございます。今後もよろしくお願い致します。

No.11 過去

ダングの姿が見えなくなると、カイは今まで苦しそうに悶えていた様子とは一変、いきなり腹に短刀を刺したまま立ち上がった。

「いやあ。今の、会心の演技だったと思わねえか？」

カイは、深く刺さった短刀を勢い良く抜くと、その短刀を眺めながら言った。

その光景に、カーザは啞然としている。

「あれ？カーザ、どうかしたのか？」

「……、俺、まさかお前が演技してるとは思わずに、お前が本当は不老不死じゃなかったんじゃないのかと思って、本気でうるたえてた……。」

カーザが間の抜けた表情で言った。

「だから、さっき言っただろう？今まで関わった人間には、不老不死だっことを気付かれないように配慮してるって。」

そのカイの言葉に、カーザは笑わないではいらなかった。

「それより、ダングが言ってた「例の物」って、何のことだ？」

カイが、自分の腹から抜き取った短刀を、手の上でクルクルと回しながら訊ねた。

「・・・・・・・・・・・・・、悪いが、今は答えられない・・・・」

結局、カイとカーザとの間には重い沈黙が立ち込め、そのまま夜が更けていった。

「自分は不老不死になったんだ」カイがそう気付いたのは、不死鳥の鮮血を浴びた直後だった。

その後の行動は実に無謀で、普通なら命を失っていただろうことを、当たり前のようにこなしていた。

無数の銃弾の雨を浴びてみたり、剣で滅多切りにされてみたり。

血は出ないが、それなりの痛みは伴うことも知った。

そんな無茶をし続けること37年の後、カイは運命の出会いを果たした。

その日カイは、ライク国の南に面した海岸にいた。

ふと目を向けた先には、2、3才ほどの女の子の手を引く女性が、砂浜を歩いていた。

黒い長い髪が海風になびき、海面に反射した光を浴びて、光り輝いて見えた。

しかし、何を思ったのか、その女性は女の子の手を引いたまま、海に向かって行った。

海水浴を楽しむような姿ではないし、何よりその日は極寒の冬の日。どう考えても、それは普通ではない行動だった。

カイは、急いでその女性と女の子のもとへと駆け寄った。

「おい！！何してんだよ！？」

カイは叫んだ。

しかし、その声を聞いた途端、女性はさらに深みへと進んで行った。一緒に連れている女の子は、大声で泣き叫びながら、女性に手を引かれていた。

「よせ！！何考えてんだ！？」

カイは、海にバシャバシャと走り入ると、勢い良く女性と女の子の手を自分の方へと引き寄せた。

すると、

「離してください！！私はもう、死ぬしかないの！！」

女性は必死な形相で、瞳にたくさんの涙を浮かべながら、カイに怒鳴るように言った。

「何言つてんだよ！！こんな小さい子を道連れにするつもりかよ！！」

カイの手を振り払おうとする女性の両腕を、カイは力強く掴んだ。

「何があつたかは知らねえけど、大事な子どもの命を奪ってまで死ぬことが、そんなに幸せなことなのか！？大事な子どもと生きることの方が、あんたにとって幸せなことなんじゃねえのか！？」

カイは一度も女性の目から目を離さなかった。

二人の荒い息の音と、さざ波の音が混ざり合う。

その傍らでは、女の子が泣き叫んでいた。

女性の瞳から、一気に涙がこぼれ落ちると、その膝も砕けたかのように、その場に崩れ落ちた。

カイは、女性と女の子を砂浜まで、優しく運んだ。

カイは砂浜に二人を座らせると、着ていたコートを二人の肩に掛けた。

泣いていた女の子の様子は落ち着き、女性は涙を拭って女の子の肩

を強く抱きしめた。

「……………もう、バカなことは考えません……………この子を護ることだけを考えて生きていきます。」

女性は、震える唇を噛み締めた。

「そっか。それを聞けて安心したよ。」

そう言つて、カイは口元に笑みを浮かべた。

そして、カイは静かにその場を離れようとした。

すると、

「あの……………！お名前だけでも……………」

女性は、少しはにかんだような表情でカイを呼び止めた。

「カイ。それが、俺の名前だよ。」

「私は、エイミと言います。この子は、ルミです……………、……………
……………ありがとうございます……………」

エイミは、深々とカイに頭を下げた。

その瞳からは光るものが一つ落ち、その声は心なしか震えていた。

それから数日後、カイはライク国の町の中で、エイミとルミを見か

ける。

しかし声を掛けることはしなかった。

その二人の横に、長身の男がいたからだ。

カイはいつしか、その町で、エイミとルミに会える瞬間を探すようになった。

エイミも、カイが町のはずれにある林の中にいることを知り、ルミと二人で林を訪れるようになった。

ルミはカイによく懐き、エイミもカイの前では笑顔が絶えなかった。

そんなある日、カイはエイミの実状を知る。

エイミの夫は町で有名な地主で、ルミと共に何不自由ない暮らしをしていること。

夫は女癖が悪く、その周りには愛人が複数存在すること。

夫は気に入らないことがあると、エイミやルミに暴力をふるうこと。

そんなことを、エイミは話してくれたのだ。

「そんな男となんて、さっさとおさらばしたほうが、いいんじゃないのか？」

そんな話を聞いて、カイの反応は当然そうだった。

しかし、

「それができれば、今頃そうしているわ……。前に一度離婚をお願いしたとき、銃を向けられたの……。殺されると思ったわ……。」

エイミは、怯えた様子で応えた。

「……………。もう少し早く、あなたと出会っていたら…………。」

エイミが呟くように言った。

微かな沈黙の後、

「俺が何とかする。だから、ルミを連れてあの男のもとを離れるんだ！」

カイが、力強い眼差しでエイミを一直線に見つめて言った。

その言葉に少しためらったエイミだったが、その言葉を信じようと大きく頷いた。

しかし、それがカイの運命の歯車を狂わせる結果になるうとは、その時のカイもエイミも気付いていなかった。

エイミはカイに言われた通り、夫のいない間に、ルミを連れていつもの林にやって来た。

しかし、その行動に目ざとく気付いたエイミの夫は、迷わず家から銃を持ち出し、カイとエイミ、ルミのいる林へと現れた。

「貴様だな！？エイミをたぶらかしてる小僧は！！」

エイミの夫の第一声は、それだった。

その表情も険しく、まるで悪人だった。

エイミは、やはり夫から逃れることはできないのだと、怯えた様子で、

「カイ、逃げて！やっぱり無理なのよ！」

ルミは、エイミの足にしがみ付いている。

「大丈夫、何とかなる！」

そう言っつて、カイはエイミとルミの前に立った。

「何をコソコソ話してんだ！？胸くそ悪い奴らめ！」

エイミの夫は持っていた拳銃を構えた。

エイミはますます動揺する。

「カイ、やっぱりダメよ！諦めましょう！」

エイミが、カイの背後からそう叫んだ瞬間だった。

バーン！バーン！！という銃撃音が林の中に響き渡った。

無数の鳥が一斉に飛び立ち、その勢いで木々が大きく揺れた。

エイミの夫が撃った銃弾は、確かにカイの体を貫いていった。

もちろん、カイがそれで死ぬはずはなかった。

しかし、エイミの夫はカイを撃つことに満足して、その場を足早に離れていった。

カイは、しめたとばかりの笑みを浮かべて、背後のエイミの方を振り返る。

しかし、そこにエイミがいない。

下を見ると、呆然と立ち尽くしたルミと、その場に倒れこんで動かないエイミの姿があった。

カイは、驚愕の現状にかれるほどの声で叫びを上げていた。

カイは勢い良く起き上がった。

どうやら、過去の夢を見ていたようだ。

その全身には大量の汗が光っていた。

カーザの部屋を後にした後、カイはサガミと二人でシオンの港に面した小さな宿で、就寝していたのだった。

窓の外には、まだ丸く大きな月が不気味に見えていた。

No. 11 過去（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。お読み頂きましてありがとうございます。今後もよろしくお願い致します。

No.12 シオンにて

再び同じ夢を見ることを恐れたカイは、宿から出て静かに波打つ港へと来ていた。

「久しぶりに見たな・・・。」

カイは、穏やかではあるが、どこか切ない瞳で遠くを見ながら、ポツリと呟いた。

エイミと出会い、別れたのは今から77年前の出来事だった。

カイは間違いなくエイミを愛していた。

しかし、彼女を助けることも護ることもできなかった。

しかも、彼女の娘のルミには、目の前で父親が母親を殺す瞬間を見せてしまった。

カイにとってあの出来事は、悪夢以外の何ものでもなかった。

しかし、しばらく記憶の片隅で眠っていたその過去が夢に出てくるというのには、何か意味があるのかもしれないと、カイは微かに感じていた。

月光の下、独り港にたたずむカイの瞳は、心なしか涙で潤っていた。

夜が明け、新たな朝がシオンに訪れた。

カイは、一晚中港にいた。

相変わらず遠くの海を眺めていたカイだったが、おもむろにズボンのポケットから写真を取り出した。

それは、テグスターのバーでダングから受け取った写真だ。

深いため息の後、カイはその写真に目を向けた。

そこには、サガミの姿が写されていた。

カイは、その写真を強く握り締めると、それを再びポケットにしまった。

宿に姿のないカイを心配したサガミは、港までカイを探しに来ていた。

港で座り込むカイを見つけたサガミは、背後から肩を叩いた。

「カイ、何してんの？」

その声に、カイがゆつくりと振り返った。

「・・・・・・・・え・・・・？」

その顔は、明らかに寝不足であることを表していた。

サガミは、心配していたはずだったが、なぜかそのカイの顔を見て笑いがこみ上げた。

「カイ、すごい顔だね・・・・！」

笑いをこらえているサガミを見て、カイは眠い目をこすった。

「私、これから父さんに会いに行つて、カーザさんと今後のこと話し合ってくるね。」

「そつか。行つてらっしゃい。」

カイが、寝ぼけた顔で笑った。

サガミが元気にその場を離れていく後姿を見て、カイは内心ホツとしていた。

出会ったばかりのサガミは、どこか張り詰めていて、父親をさらわれた時には、その張り詰めた様子は一層悪化していた。

しかし、父親の無事を確認し、その容態も良い方向に向いていることを感じたサガミの様子は、多少和らいだように見えていた。

だからと言って、現状に安心ばかりはしてられない。

前日にカイとサガミに銃弾を浴びせた人物が誰なのかも定かではないし、カーザとダングの間で交わされた会話の中にあつた、「例の物」とは一体何なのかも明らかではない。

まるで謎が謎を呼んでいるようだった。

色々と思考を巡らせていたカイだったが、さすがに疲れを感じ、宿に戻ろうと立ち上がった。

すると、

「カイ・・・？」

背後から声がした。

そちらを振り返ると、

「ミキカ・・・！？」

暗い表情でカイを見つめるミキカの姿があつた。

「どうしたんだよ？こんな所で。」

そのカイの質問に、ミキカはただうつむくだけだった。

サガミは、カイと別れた後、カーザのもとを訪れていた。

「お父さんの容態は、いたって順調に回復しているよ。もうしばらくここで療養していれば、普通に生活するのに何不自由ない状態で回復するはずだよ。」

カーザのその言葉に、サガミの表情が綻ぶ。

「あの・・・、でも・・・。」

サガミが少しまごついた。

すると、

「？もしかして、お金のこと？それなら心配なくて良いよ。色々事情がありそうだし、別に金儲けしようって気もないしね。」

カーザが穏やかな笑顔で言った。

サガミは、カーザの優しさに感謝しつつ胸を撫で下ろした。

「あーそうだ。これ・・・、カーザさんに見せるようにって、受け取ってたんです。」

そう言って、サガミはミキカから受け取っていた、シルバーの星の飾りがついたネックレスを、ポケットから取り出した。

すると、カーザはそれを受け取り、

「キミも、ミキ力の知り合いなんだね？」

穏やかに懐かしむような笑みと、微かに切なさを感じているような表情を浮かべながら、そのネックレスを眺めている。

「これ、俺が預かつちゃっていいかな？」

そのカーザのいきなりの問いに、

「あ、はい！」

と、サガミはとつさに頷いた。

「ミキ力は、まだイレイザーの連中に従ってるのかな？」

カーザが、問いなのか独り言なのか区別しづらい呟くような言い方で、言った。

そのカーザの言葉の意味が、サガミには分からなかった。

サガミは首をかしげている。

そのサガミの様子を見て、カーザは明らかにしまったというような表情を浮かべた。

「イレイザーって、何ですか・・・？」

サガミは目ざとくそのカーザの動揺を見抜き、訊ね返した。

「いや、何でもないんだよ！知らないなら、いいんだ。」

カーザが素早くその場を離れていった。

港で再会したカイとミキカは、シオンの町中にあるレストランに来ていた。

「店は、大丈夫なのか？」

カイがメニューを見ながら言った。

「ええ。」

ミキカが、レストランの従業員が持ってきた水を、少し口に含んだ。

「俺まだ朝飯食ってないんだよね。ミキカは何か食うか？って言うても、おごらないぞ。」

そう言つて、カイは笑顔でミキカにメニューを差し出した。

「私はいいわ。」

ミキカの目は、会ってから一度もカイの顔を見ていない。

「そつか。じゃあ、俺はシーフードグラタンにしようっと。」

そして、カイが楽しそうに従業員に注文した。

相変わらずうつむいているミキカを見たカイは、

「何だよ？朝からグラタンかよ！？って、思ってたのか？」

と、これもまた楽しそうに言った。

しかし、そのミキカの心境的を見事に外したカイの言葉に、ミキカは深く大きなため息を吐いて見せた。

「何も分かってないのね……。」

「何が？」

カイが、自分の手元にあった水を一気に飲み干した。

「今、自分が置かれている状況をよ。」

「ミキカ、……何か暗いぞ、お前。」

「ちやかさないで！！」

ミキカが、両手でテーブルを殴って怒鳴った。

その勢いで、ミキカの手元にあった水の入ったグラスが揺れた。

「何、怒ってたんだよ？俺が置かれてる状況って、何の話だよ？」

「・・・・・・・・ダングが、私に指令を出したわ・・・・。」

カイの表情が、一瞬にして硬くなった。

「あなたを殺すこと。それが、ダングが私に与えた指令よ・・・・。」

レストランの従業員が、カイのもとにシーフードグラタンを運んできた。

湯気が元氣良く立ち込めている。

「・・・・・・・・、そもそも、私なんかに関わったのが、運の尽きだったわね、カイ・・・・。私は、私自身のためにも、指令を無視するわけにはいかない。だから、次に会った時は私はあなたを・・・・、殺すから・・・・。」

そう言い残したミキカは立ち上がると、姿をひるがえし、その場を静かに去って行った。

No.12 シオンにて（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。お読み頂きましてありがとうございます。今後もよろしくお願い致します。

No.13 追憶のとき1

カイは考えていた。

昨夜、なぜ過去の夢を見たのかが、何となく分かった気がしていたのだ。

カイが、ミキカと出会ったのは今から2年前のこと。

それは、偶然という言葉だけでは言い表せないような出来事だった。

エイミの死後、カイは激しい自暴自棄に陥っていた。

エイミを救えなかった自分。

エイミを護れなかった自分。

エイミとルミを不幸に落とし入れてしまった自分。

カイは、そんな全ての自分が許せなかった。

思いつめ、追い込まれたカイは、いつしか「死ぬ」ことを考え始めた。

しかし、不死の体となったカイが「死ぬ」ことなどできない。

もはやカイにとって、「死」とは無謀な願いであり、けして叶うことのない希望なのだ。

その時に、カイは初めて知ることとなる。

偶然に手に入れたこの不老不死の体は、今となって考えてみれば、カイにとっては、未恐ろしい「呪い」に過ぎず、けして幸せなことではないということを・・・。

そう、不死鳥は自分の体を傷つけた者に対して、不老不死という能力を与えていたのではなく、不老不死という過酷な呪いを浴びせていたのだ。

カイはそんな事に、エイミを失って初めて気付いたのだった。

「死」を考え始めたカイは、不老不死の人間が死ぬ方法を探り始めた。

数え切れない程の文献を読みあさり、あらゆる土地にいる不死鳥の情報通を訪ね、気が付けば、エイミと死別してから早くも75年の時が過ぎていた。

しかし、「死ぬ方法」の、確かな情報は得られず、ただ時間だけが過ぎていった。

その間に唯一知ったのは、「不死鳥の鮮血には不老不死の能力があるが、不死鳥の体外に出てからある程度の時間が経過した血には、「死」の能力が宿る」ということだった。

カイはそれが、もしかしたら自分にとって唯一の、「死ぬ手段」なのかもしれないと考えた。

しかし、不死鳥を探すことはそう生易しいことではない。

ましてや、その血を採取することなど、困難に近い。

カイは、途方に暮れた。

そして気が付くと、カイはエイミとルミと初めて会った海に来ていた。

あるいは、この広い大きな海に漂うことで、「死」というものに出会えるかもしれないと、カイは密かに願っていたのかもしれない。

この日も、凍てつく風が吹き荒れる、極寒の冬の日だった。

砂浜を、無意識に進んでいると、カイは思わぬ光景を目にする。

黒い長い髪を海風に撫でられながら、海を眺める女性が砂浜にポツンと独り立っていたのだ。

カイは、息の止まる思いがした。

「・・・・・・・・エイミ・・・・・・・・？」

かすれた声で、カイは呟いた。

そして、一目散にその女性の方へと走った。

しかし、女性はカイが予想もしていなかった行動に出た。

女性は、大きく深呼吸すると、しっかりとした足取りで、海へと入っていったのだ。

カイは、目を疑った。

夢を見ているのか？過去の幻想を見ているのか？そんなことを考えながらも、カイはその女性の腕を力いっぱい引き寄せた。

驚いて振り返った女性は、エイミだった。

「エイミ・・・！？」

驚愕の声を上げるカイに、

「何なの！？邪魔しないでよ！！」

そのエイミと思わしき女性は、力強く怒鳴ると、カイの手を振り払った。

しかし、カイは自分でも驚くほど素早く、その女性の腕を再び掴むと、砂浜へと連れ戻した。

「邪魔しないでって言うてんでしょ！！何なのよ！？私は、ここで自分の人生にピリオドをうとうとしてるのに、何で邪魔するのよ！！？」

その、叫びのような怒鳴りを上げるその女性を、カイはただ見つめていた。

すると、そのカイに少し女性がたじろぐ。

「な、何・・・？」

「キミ、……名前は……？」

そのカイの質問に、女性は素直に答える。

「名前……？……ミキ力だけ……。」

そう、それはミキ力だった。

それが、カイとミキ力の出会いだった。

しかし、ミキ力はエイミと見間違っただけにそっくりで、カイは言葉に詰まった。

「私の邪魔をしないと、だんまりとは、どういう神経してんのよ……！？」

ミキ力は確かに、エイミと比べると性格的な面で異なる部分が見られるが、カイは瞬時に悟る。

ミキ力は、「エイミの再来」だと。

エイミを救い、護れなかった報いを、償うチャンスが舞い降りたのだと。

「俺の名は、カイ。……、キミの力になりたいんだ。」

そのカイの言葉に、ミキ力は不審な表情を浮かべた。

「たった今会ったばかりの私に力を貸そうっていうのは、一体どう

いうボランティア精神なわけ・・・？はい、そうですか。って、いきなり信用しろっていうほうが、おかしいと思うけど・・・。」

そのミキカの見解は正論だった。

カイの事情を知らないのだから、そう考えるのが普通である。

すると、そこへ一人の男が姿を現す。

「ミキカ、こんな所で何してんだ？」

「・・・・・・・・！ダング・・・・。」

ミキカが、ダングを見て身構えた。

「まさか、逃げようとか考えたりしてねえよな？」

ダングが、そう言いながら懷から短刀を取り出した。

「逃げる？私が・・・？何で、逃げなきゃいけないのよ・・・！」

強気な発言をしているミキカだが、その唇は微かに震えていた。

「いや、良いんだぜ逃げて。そのかわり、お前の命もお前の兄貴の命も、なくなるものと考えてもらわないとな。」

「！？カーザは、関係ないでしょう！！？」

ミキカが、すごい剣幕で怒鳴った。

ダングは、短刀を回転させながら高々と上に向かって投げた。

そして、それを即座にキャッチすると、ミキカに向かってその刃を走らせてきた。

しかし、その攻撃をカイが素早く食い止めた。

短刀を持つダングの手を掴むカイの手は、力強い。

「何だ、てめえは・・・？手を離せ・・・。」

ダングの目つきが、一層険しくなる。

「悪いけど、この手は離せない。俺には、あんたがミキカを殺そうとしているように、見えるからね。」

カイが、鋭い目つきでダングをにらんだ。

ミキカが、少しうつらたえた様子で二人のやりとりを見つめている。

しばらくカイとダングは、にらみ合っていた。

そして、沈黙を破るようにダングがフツと鼻で笑い、

「まあ、いい。今回は大目に見てやるか・・・。」

もう片方の手でカイの手を自分の手からどけると、短刀を懐にしまい、足早に去って行った。

No.13 追憶のとき1（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。だいぶ、場面が転々としていますが、「追憶」しているところがけっこう重要な部分なので、見放さずにお読み頂けたら幸いです（汗）

No.14 追憶のとき2

ダングが立ち去った後、ミキカは大きく息を吐いた。

「・・・、ありがとう。助かったわ・・・。」

ミキカが、微かに笑みを浮かべながらカイに言った。

「いや、いいんだよ。・・・、当然のことをしたまでだから。」

その言葉を聞いて、ミキカが優しく微笑んだ。

「何か、困ってることがありそうだな？」

そのカイの問いに、ミキカは一時の間の後、自分のことを話し出した。

ミキカの母親は、裏社会で名を馳せている、「イレイザー」という殺し屋一味の頭の、孫としてこの世に生を受けた。

当然、ミキカの母親はその家業とも言うべき仕事に就くことが強いられていたが、残酷な殺し屋などにはなりたくないという気持ちから、幼い時に早くも家を飛び出したのだという。

それからしばらくは、イレイザーの人間から逃れ、それなりに平穏無事に暮らし、やがて子どもを二人儲けた。

それが、ミキカと、その兄のカーザであった。

しかし、ミキカが12歳の時に、両親は亡くなり、兄妹二人で肩を寄せ合って細々と暮らしていた。

そして、ミキカが15歳の時に、イレイザーの人間に所在を掴まれ、ミキカだけが連れ戻されてしまった。

その時のカーザは、当時暮らしていた所の近くの診療所で医学を学び、医者としての才能を開花させようとしている時だった。

カーザに医学を教えたその診療所の医師が彼を護ったから、カーザはイレイザーに引き戻されなかった、というのもあるが、実際は、彼が何やら「切り札」を握っていたおかげで、連れ戻されなかったようだ。

しかし、イレイザーの連中の考えることは汚く、ミキカには、「カーザの命を奪われなくては、おとなしくイレイザーに従え。」と告げ、カーザにも、何か脅しをかけていたようで、やがてミキカにもその所在が掴めないようになった。

ミキカは、もし自分が従わなければ、いくら切り札を握るカーザであっても、イレイザーならいとも簡単にその命を奪い、けして脅しなどではないのだと、自分に見せしめるだろうことは、よく分かっていた。

だから、ミキカはイレイザーに従い、他人の命を奪う残酷な行為を

やらざるを得ない状況に置かれていた。

しかし、「殺し屋」としての時間を重ねていくうちに、ミキ力の善良な精神は麻痺していった。

他人を「殺す」という行為が、今のミキ力には至極自然な行為になりつつあったのだ。

そんな自分が、ミキ力は恐ろしかった。

いつそ、いなくなりたいと考えた。

しかし、それすら許されないのだろうか、ミキ力は絶望している。

カイは、ミキ力が望むことを叶えてやりたい気持ちがあつた。

しかし、「死」以外に、このミキ力が望むものが何なのか、分からなかった。

そして、カイは、こう口にする。

「俺は、力になれることは、あるか・・・？」

そのカイの質問に、ミキ力は、

「・・・・・・・・じゃあ、私の代わりに殺し屋になって・・・・。私の力になるってことは、そういうことなのよ・・・・。私に力を貸そうなんて、到底無理だつてことが分かったでしょう・・・・？」

と、うつむき、目を閉じ、しかし、微かに口元だけを笑わせて答え

た。

その言葉にカイが応える前に、ミキカはその場を静かに離れようとした。

しかし、カイがミキカに応える。

「分かった。力を貸すよ。」

ミキカは、何も応えなかった。

何故、今になってエイミとの過去を夢に見たのか。

カイは、「エイミを救えなかった」。

そして結局、「ミキカも救えなかった」。

だから、カイの中で結論は、こうなった。

死してなお、「エイミは、自分を怨んでいる」。

エイミへの償いになればと、ミキカに加担したが、それは根本的に間違っていて、そもそも、ミキカが言ったように、自分の行いは単

なる「偽善」に過ぎず、そんなことで自分が許されるはずもなかったのだと、カイは自分なりに悟った。

本当は、このまま苦しみ生きることが、エイミヤルミへの償いになるのではないかと、カイは考える一方で、その恐怖さえ感じていた。気が付けば、カイの目の前のシーフードグラタンは、すっかり冷め切り、先ほどまでの元気な湯気は見られなくなっていた。

No.14 追憶のとき2（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。今回は少し短めです。今後
もよろしくお願い致します。

No.15 撃て

サガミは、カーザの言った「イレイザー」というのが、無性に気になって仕方がなかった。

それを、どこかで見たことがあるような気がしていたのだ。

しかし、それをどこで見たのかが、どうしても思い出せないでいた。カーザのもとを後にして、サガミはシオンの町にある小さな図書館を訪れた。

何か不死鳥に関する珍しい文献でもないかと、探しに来たのだ。

サガミは、ゆつくりと色々な本を見ていくと、幼い頃に読んだ不死鳥研究の書物を見つけた。

懐かしく思い、それを無意識にパラパラとめくっていると、サガミはあるページでその手を止めた。

「これは・・・！」

そこには、次のようなことが記されていた。

「近年、裏社会ではイレイザーというコードネームの殺し屋一味が名を馳せているが、その頭のリュウという男は、どうやら不死鳥の鮮血に触れ、不老の力を得たという噂が密にある。」

サガミは、何度も読み返した。

先ほど、カーザが口にした「イレイザー」というのは、この書物にある「イレイザー」と同一なのだろうか、サガミは冷静に考え始めた。

しかし、もしそうであつたとしたら、カーザは気になることを言っていた。

「ミキカは、まだイレイザーの連中に従つてゐるのかな？」という言葉だ。

「従う」ということは、サガミがテグスターのレストランで会つたミキカは、イレイザーつまり殺し屋であるということになる。

そして、そのミキカからいつも仕事を提供されているカイは、同様に殺し屋であるという結論に至る。

サガミは、しばらく呆然と一点を見つめていたが、何か思いついたように、図書館を走り去った。

図書館を出たサガミは、カーザの部屋を目指して走っていた。

その途中で、サガミはカイとバッタリ出くわす。

サガミは立ち止まった。

「あれ？サガミ、そんなに急いでどこ行くんだ？」

そのカイの言葉に、サガミは特に応えるでもなく、カイの方をにらみ付けると、

「私、あんたを見損なったかも・・・！」

とだけ言つと、再び走り出した。

カイは、どういう意味かも分からず、その場に立ち尽くしていた。

サガミは、カーザの部屋に着くと、厳しい表情を浮かべながら、カーザの目の前に立ちはだかった。

「サガミちゃん、どうしたの？」

カーザが、何食わぬ顔をして言った。

サガミは、大きく息を吸い込むと、

「カーザさん、・・・、さっきのイレイザーの話だけど・・・。」

表情の厳しさとは裏腹に、落ち着いた声で言った。

そのサガミの言葉に、カーザはばつの悪そうな顔をした。

「もしかして、イレイザーって・・・。」

サガミの全てを見透かしているかのような真っ直ぐな瞳に、カーザはため息をついた。

「・・・、もしかして」ってことは、何か心当たりがあるんだね・・・？」

サガミが、静かにうなずいた。

それを見たカーザは、

「さっきは、うかつだったよ・・・。キミがミキカの知り合いだとしても、ミキカの素性まで知っているとは限らないもんね・・・。秘密事を持っているようじゃ、お父さんを預けるには不安だろうし、話せる範囲でキミにも話すよ。」

落ち着いた面持ちで言った。

そして、カーザはサガミに、自分のことや妹のミキカのことを話した。

イレイザーという殺し屋組織のこと。

自分たち兄妹がなぜ、そのような残酷な一味に関係しているかということ。

カーザは丁寧に、順を追って話していった。

それを、サガミは真剣な表情で聞き、理解していく。

しかし、サガミはその中で、疑問に思う事柄があった。

「カイは、・・・イレイザーなんですか・・・？」

サガミのその質問に、カーザは複雑な表情で頷いた。

「カイは、俺とミキカが引き離された時、俺の所在を見つけ出して、イレイザーの連中には内緒で、ミキカと俺を再会させてくれたんだ。でも、その時には、すでにカイはイレイザーの一員だった・・・。なぜ、カイがイレイザーになったのかは、俺にも分からないけど、何か理由があつてのことだとは思うよ。」

サガミは、少し悩むような表情を浮かべた。

そして、

「カーザさんは、なぜイレイザーに連れ戻されずにすんだんですか？」

サガミが、もう一つの疑問を投げ掛けた。

しかし、カーザは先ほどまでとは打って変わって、口を開かなくなってしまった。

「何か、事情があつたんですか・・・？」

そのサガミの質問がカーザにされたのと同時に、カーザの部屋に複
数人の男が押し入ってきた。

そして、その男たちは、サガミとカーザを取り押さえると、何も言
わずに二人を連れ去っていった。

それと同じ時、シオンの町を歩いていたミキカは、明らかに自分を
待ち伏せしている様子のダングと遭遇した。

「何？ ストーカー？」

ミキカが冷たい視線をダングに送った。

すると、ダングは含み笑いを浮かべると、

「だいぶ探し回ったからなあ、そう思われても仕方ないかもな。」

と、自分の目の前を歩き去るミキカを追いかけてながら言った。

「それで、用件は何？」

ミキカはチラリともダングの方を見ずに言った。

「カイは、もう殺ったのか？」

そのダングの楽しそうな声に、ミキカは思わず立ち止まった。

「さつき、レストランでお前とカイが、楽しそうにお食事してるのを見かけたぞ。」

チラツと見た先のダングの瞳が、明らかに色を変え、鋭くなっていることにミキカは気が付いた。

「………、殺すって、宣言しに行っただけよ。」

そのミキカの返答に、ダングは万遍の笑みを浮かべると、

「そうか！そうだったか。じゃあ、丁度良かった。お前のために絶好の場を与えることができそうだ。」

と言って、ダングは力強くミキカの腕を引っ張って、歩き出した。

ミキカの表情に、微かに焦りの色が滲んだ。

走り去ったサガミが気になったカイは、町中を探した後、カーザの部屋へと来ていた。

しかし、そこにはサガミも、カーザの姿さえもない。

いるのは、部屋の奥でぐっすりと眠っているサガミの父親だけだった。

しばらく部屋にいたカイは、次第に強烈な睡魔に襲われる。

段々と意識が遠のき、やがてその場で眠り込んでしまった。

複数の男たちに連れ去られたサガミとカーザは、見知らぬ倉庫に連れ込まれた。

たくさん荷物が置かれた、だだっ広いその倉庫では、抵抗するサガミとカーザの声が響いた。

しばらくすると、二人の男に引きずられて、ぐったりとしたカイが倉庫に運び込まれた。

それを見たサガミが、

「カイ!？」

心配そうな表情で叫んだ。

しかし、

「大丈夫。きつと眠ってるか、気絶してるだけだよ。」

カーザがいたって冷静な様子でサガミに応えた。

カイは、そのまま倉庫の奥にある柱に縛られた。

「ちょっと、あんたたち一体何者なのっ!？ 私たちをどうしようって言うのっ!？」

サガミが、すごい剣幕で怒鳴り散らした。

しかし、男たちは何も反応しない。

「何か応えるよっ!!!」

そう叫んで、サガミは自分の腕を拘束している男目掛けて頭突きした。

男のカーザよりも激しく暴れているサガミに、カーザの腕を掴んでいた男が一人、サガミの方へと移った。

それでも、サガミを完全には押さえつけられない。

そこへ、ダングとミキカが現れる。

「準備万端みたいだな。」

ダングが、笑顔で言った。

「ミキカ!？」

カーザが、突然暴れ出した。

それを、男たちが殴って止めようとする。

「ちょっと!やめなさい!」

ミキカがカーザのもとへ駆け寄り、男たちに怒鳴った。

男たちが大人しく従った。

「大丈夫、カーザ?」

そのミキカの言葉に、カーザは笑顔で頷いてみせた。

すると、ミキカの背後にダングが現れ、

「ミキカ、あれを見る。」

ダングが、倉庫の奥を指差した。

そこには、柱に縛り付けられてぐったりとしているカイの姿があった。

ミキカの表情が固まる。

ダングは、ミキカの背中を押した。

ミキカは、力無くフラッとカイの方に一步近づいた。

「お前の、カイへの宣言を果たす時だぞ。さあ、殺れ。」

そう言っ、て、ダングはミキカの手に拳銃を握らせた。

しかし、ミキカはその拳銃を構えようとしな

「どうしたミキカ。早くやれよ。」

ミキカが唇を噛み締めた。

「……………で……………きない……………」

「ん!？」

ダングが、嫌味な聞き返し方をした。

「できないっ！！」

ミキカが、叫びのような声を上げた。

「分かった。決心を固めてやろう。」

そう言って、ダングは懷から拳銃を取り出し、その銃口をカーザのこめかみに当てた。

それを見たミキカの表情が、歪む。

「お前がカイを撃てば、カーザは助かる。お前がカイを撃たなければ、カーザは死ぬ。簡単で分かり易いだろう？」

そのダングの卑劣な行動に、

「なんて、卑怯な奴！！全然、状況は飲み込めないけど、ミキカさんがどちらも選べないのは、分かっているだろう！！？」

サガミが、食いかかるような勢いでダングに怒鳴った。

するとダングは、

「状況が飲み込めないなら、口を挟むな。」

背筋がゾクゾクするほどの凍てつく瞳で、サガミをにらみつけ言った。

ミキカが、静かに銃口をカイに向けた。

その手は震えている。

「ミキカさん!？」

サガミが、叫んだ。

「いいぞ、ミキカ。」

ダングが、ミキカの耳元で囁いた。

一瞬の沈黙の後、

「ミキカ! 撃て!」

カーザの声が倉庫内に響き渡った。

ミキカが、驚きの表情を浮かべながら、カーザを振り返った。

「大丈夫だから、撃て!」

カーザは、叫び続けた。

しかし、

「カーザ、あんた何言ってるの・・・!？」

ミキカが、青ざめた顔で言った。

するとダングは、

「ははははははっ!!」

腹を抱えて笑い出す。

「ミキカ、お前の兄貴はどうやら命乞いしているようだぞ！自分が助かりたいがために、カイを犠牲にしようっていう、潔い判断だ！歯切れが良くていい！」

しかし、そんなダングの笑い声など気に留めることなく、カーザはミキカに叫び続ける。

「お前が撃てば、何とかなる！とにかく、撃つんだ!!」

ミキカは、明らかに動揺し始めた。

その息は荒くなり、手元にまで汗が光っている。

「カーザさん、正気！？どうしちゃったの!？」

啞然としていたサガミが、カーザに叫ぶ。

しかし、カーザはそれすら耳に入れようとしていない。

「俺の言うことを信じろ！ミキカ！」

しかし、そのカーザの叫びを、ミキカは聞き入れようとしていない。痺れをきらしたカーザは、自分を拘束していた数人の男たちの腕を振り払うと、ミキカの震える手から拳銃を奪い、バーン!!・・・

倉庫内にその音はこだました。

カーザが放った銃弾は、カイの眉間を見事に捉えていた。

その光景を目にしたミキカが、腰を抜かしたように、その場に座り込んだ。

サガミも、驚きのあまり、身動きがとれない。

しかし、

「カーザ。見直したぞ。お前がまさか、こんな躊躇なくカイを撃ち抜くとは、思ってたな。」

ダングだけは、驚いた様子に笑みを浮かべながら、カーザの肩を叩いた。

「後の処理は、俺がやる。」

カーザのその言葉に、ダングは「任せたぞ」とカーザの肩をポンポンと叩くと、男たちを従えて倉庫を後にした。

No.15 撃て(後書き)

こんにちは。作者のJOHNEYです。お読み頂きまして、ありがとうございます。今後もどうぞよろしくお願い致します。

No.16 苦悩

座り込んでいたミキカが、勢い良く立ち上がると、カーザの方へと歩み寄り、その頬を平手で一発強打した。カーザが、痛そうに頬を撫でる。

「カーザ、あんた見損なった……！もう、医者なんてやめちゃいなよ！こんな……、こんな……！！！」

ミキカは、瞳に溢れ出した涙と、こみ上げる思いを抑えきれずに、顔を両手で覆った。

サガミも、先ほどまでの元気はなく、ただ呆然としている。

そんな二人を見たカーザは、おもむろにカイの方へと歩み寄ると、

「二人も、カイの縄ほどの手伝ってくれよ！」

何もなかったような素振りと言った。

そして、

「カイ！！お前も、いつまでそうしてるつもりだよ！？そうやって紛らわしいことしてるから、俺が悪者扱いされんだろぅがっ！」

カーザは何を思ったのか、ぐったりとするカイの頭を殴りつけた。

すると、

「いつてえなあ……。もう、済んだのか……。？」

頭をガシガシと掻きながら、カイが大あくびした。

ミキカも、サガミも、目が点になる。

「ど、どういうこと……。？？」

サガミが、半分笑い、半分怯えたような表情で言った。

「カイ、……。防弾チョッキでも着てたの……。？」

ミキカが、カイのもとに駆け寄り、不可思議な状況に混乱した様子で訊ねた。

「撃たれたのは、頭なんですけど。」

傍らからカーザが言った。

「じゃあ、何で生きてるのよっ！？」

ミキカが、脇から口を挟んだカーザに怒鳴った。

「どういふことなのか、しっかり説明して。これじゃまるで、カイは……。？」

ミキカのその真剣で重々しい声に乗っかるように、

「……。不老不死……。不死鳥……。？」

サガミが、呟くような声で言った。

それに、ミキカが反応する。

「カイ、……………そうなの……………」

複雑な表情で見つめるミキカに、カイは悲しげな笑顔で一度頷いた。すると、サガミが突然勢い良くカイのもとへ駆け寄り、カイに掴みかかった。

そして、

「不死鳥の鮮血を浴びたのっ!？」

すごい形相でサガミは、カイに訊ねた。

それにも、カイは驚くでもなく、ただ悲しげな表情で頷いた。

その瞬間に、サガミは思い切りの良い右ストレートをカイにお見舞いした。

それを見ていたカーザが、次の一打に備えて振りかぶったサガミを取り押さえた。

ミキカは、突然の出来事に啞然としている。

「やっぱり、見損なつた!! 罪の無い他人の命を平気で奪える上に、自らの欲のために貴重な不死鳥の体を傷つけて鮮血を奪うなんて、最低だっ!!」

カーザに止められたサガミが、今にもカイに飛び掛りそうな勢いで怒鳴った。

しかし、殴られたカイは、反論も反撃もせずに、ただうつむいていた。

そして、サガミはカーザの腕を振り切ると、そのまま一目散に倉庫を走って出て行った。

「サガミちゃんは、…………男勝りどころじゃないな…………。」

カーザが、呆れた様子で一言もらした。

すると、

「何で…………あいつ、俺が殺し屋だって知ってんだろう……………
…………。」

うつむいていたカイが、小さなかすれた声で言った。

「悪いっ！！俺があの子にしゃべったんだ…………！」

カーザが両手を合わせてカイに頭を下げた。

「そっか…………。」

と一言だけ言って、カイも倉庫を重い足取りで後にした。

カイは、倉庫を後にした後、シオンの船着場とは間逆の方向にある、人気の無い岸壁に来ていた。

ただその先に広がる広大な海を眺めていれば、自分の中の汚れた部分が浄化されていくとしたら、どんなに楽だろうとカイは考えた。

岸壁に座り込み、背中を丸めているカイを、ミキカが見つける。

ミキカは、カイに静かに歩み寄った。

「どうして、話してくれなかったの・・・？」

そのミキカの柔らかな声に、ひどく意気消沈しているカイが振り返る。

「私、別に恐くないわよ。カイが不老不死だろうと、怪物だろうと。これでも私は、見返りも期待せずに協力してくれたカイに、一応感謝してるの・・・。」

そう言っつて、ミキカはカイの隣に座った。

「でもこれで、何故カイが突然イレイザーを抜けるって言い出したのか、分かったような気がするわ・・・。これ以上私たちと一緒にいたら、自分が不老不死であることがばれてしまうからでしょう・・・」

・？」

そのミキ力の問いに、カイは遠くの海を眺めながら、力なく頷いた。

「俺は・・・・・・・・」

ずっと黙っていたカイが、口を開く。

「お前に、謝らなければならないことがあるんだ・・・・。」

「謝る？何を・・・・？」

ミキ力が、身を乗り出した。

「俺は、お前やカーザやサガミの曾祖父母より、さらに昔の年代に生まれた。今年で133才になる。」

静かに語り始めたカイに、ミキ力は真剣な表情で耳を傾ける。

その近くにある木の陰には、思わずカイを殴りつけたことに少し後悔しているサガミがいる。

「不死鳥の不老不死の能力なんて、初めから興味なかった。ただ、その姿を一目見たいと思ったんだ。それだけだった。でも、不死鳥は思ったより気性が荒くて、俺を突然襲ってきた。傷つける気なんてなかったんだ・・・・。でも、仕方なかった。そうしてなかったら、今頃俺は冷たい土の中だ。」

カイが一度、小さく息を吐いた。

「不老不死になってから数十年後、俺はある女性と出会った。その人の名はエイミ。暴力的な夫に悩まされていて、自殺をしようとしていた。」

ミキカが、少し考え込む様子になった。

「エイミには、ルミという幼い娘がいて、・・・」

そのカイの言葉をミキカが遮る。

「ちょっと待って！」

カイが話すのを止めた。

「ルミ・・・。今そう言ったわよね・・・？」

カイは、小さく頷いた。

「私の祖母の名前もルミっていうんだけど・・・。それは、関係ある・・・？」

カイは、少し考えた後、再び小さく頷いた。

そして、

「お前に初めて会った時、目を疑ったよ。エイミが再来したのかと思った。しかも、かつてのエイミと同様、海で自殺しようとしてた・・・。その時は他人の空似かとも考えたけど、お祖母さんの名前がルミっていうなら、きっとエイミはお前の曾祖母だったんだな・・・。」

ミキカの瞳から目を離さずにカイは言った。

「俺はかつて、エイミとルミを救おうとして、結局最悪の事態に落とし入れてしまったんだ……。だから、目の前で救いを求めているお前を救えば、エイミたちへの償いになるんじゃないかと、勝手に思い込んだ……。でも、実際はエイミたちを救えなかったように、お前のことも救うことができなかった……。結局、俺のEGOに過ぎなかったんだ……。俺は、お前を救おうと考える反対側で、実は自分がエイミたちへの罪から逃れる方法を探していたんだ……。」

カイは、頭を抱えた。

そして、何もしゃべらなくなった。

「カイ……。私は、救われなかったなんて思わないわ……。私の曾祖母であるエイミへの償いに、私を救おうと考えたっていうのは……。まあ……。正直……。シヨックな部分もあるけど……。でも、唯一の肉親であるカーザと離れ離れに暮らしている中で、私の心より所は、間違いなくカイ、あなただったから……。」

ミキカは、カイの横顔を見つめた。

「イレイザーに無理矢理従わされて苦しんでいた私に、方法はどうであれ、力を貸してくれたカイに感謝してるわ。それに、私はもう誰かに救ってもらわなくても、大丈夫……。充分よ……。ありがとう。」

そう言つて、ミキカはどこか悲しげな笑みを浮かべながら、カイのもとを離れて行つた。

ミキカが最後に言つた「ありがとう」は、カイにとっては「さようなら」の意味に聞こえた。

ミキカの心が完全にカイのもとを離れていった。

そんな気がしたからだ。

今のカイの頭の中では、マイナスな方向にしか思考が向かなくなつていた。

No.16 苦悩（後書き）

更新が遅くなりまして、申し訳ありません。今後もよろしくお願
い致します。

No.17 気持ち

しばらくして、カイは立ち上がった。

カイが宿に戻ろうと、歩き出すと、木の陰にたたずむサガミを見つける。

「サガミ？」

「あつ！！・・・いや、・・・その・・・立ち聞きするつもりはなかったんだけど・・・。」

サガミが、ばつの悪そうな様子で苦笑いを浮かべた。

「あ、あのさあ、・・・さつき、思いっきり殴ったこと、ちょっと反省してて・・・ごめん・・・。」

サガミは、素直にカイに頭を下げた。

「謝る必要なんてないよ。サガミが怒って当然のことだし・・・。」

カイの哀しみに満ちたような表情を見て、サガミが口を開く。

「さつき、ミキカさんを「救えなかった」ってカイ言ってたよね・・・？」

カイが、「ああ」と一言応えると、浅いため息をついた。

「私、それは間違ってると思うよ。」

カイは、サガミの濁りのない瞳を見つめた。

「……俺は、ミキ力を救えなかっただけじゃないんだ……。結局、俺はミキ力に苦しみまで与えてしまった……。さっき、ミキ力の言葉を聞いただろ？俺のことを、「心のより所」だったって……。その俺を殺す役目を、あいつに負わせてしまった……。最悪のパターンだよ……。」

カイが、微かに口元に笑みを浮かべて言った。

今まで見たことのない沈んだ様子のカイに、サガミが力強い眼差しを向けた。

「……カイ。過去にカイが救えなかったっていう女性とミキ力さんでは、事情が違うよね？だって、ミキ力さんは今、生きてるんだよ？まだミキ力さんが苦しんでいると思うなら、カイはミキさんを救うことができるはずでしょう？……。部外者の私が口を挟むのは、うっとうしいかもしれないけど……。ミキ力さんを「救えなかった」なんて言うのは、まだ早すぎると思う。」

二人の間にサラサラと風邪が駆け抜けた。

一瞬、間ができた。

「カイ……。諦めないでよ。そんな顔しないでよ。私も協力するから。」

サガミの言葉を、カイは呆然とした様子で聞いていた。

「だって私、カイに借りがあるでしょう?」

サガミは、万遍の笑みを浮かべて見せた。

すると、

「……………、そうだな……………。俺、まだ諦めるには早すぎたよな。……………サガミ、……………ありがとう。」

カイが、ほのかに笑みを浮かべると、サガミを抱き締めた。

サガミは驚きのあまり、身動きがとれない。

ほんの数秒間、サガミはカイの温もりを近くで感じた。

そして、カイはサガミから離れ、その場を立ち去っていった。

サガミにとっては、長い数秒間に感じられた。

サガミが宿に着くと、部屋の前にミキカが立っていた。

「ミキカさん、どうしたんですか？」

そのサガミの声に反応して、ミキカがそちらを振り向く。

「あなたに、話しておかなければならないことがあるの……。」

ミキカの表情は重苦しいほど真剣だった。

サガミはそのミキカの様子に、ただ事ではないと察知しつつ、緊張しながらミキカを宿の部屋へと招き入れた。

部屋に入ると、ミキカは早速サガミに問う。

「イレイザーって、知ってる？」

そのミキカの質問に、サガミは頷いた。

「じゃあ、私がイレイザーの一員であることも？」

それにも、サガミは頷いた。

「そう……。それなら、話は早いわ……。」

ミキカは、ため息混じりに言った。

そして、ミキカは語り出す。

「イレイザーっていう殺し屋一味ではね、依頼を受けて指令を出す幹部の人間と、実際にターゲットを仕留めるキラーの、二種類の分

担当があるの。幹部っていうのは、さつき倉庫で私と一緒にいた男がそうんだけど……。イレイザーが何故、裏社会で暗躍しているかと言うと、その殺しの方法が全て「暗殺」だからなの。「暗殺」は、ターゲットを一度で確実に仕留めなければならないというリスクと、それによって存在が公に広まりにくいという利点がある。」

サガミは、ミキ力が何故イレイザーについて事細やかに語っているのか、不思議に思いつつも、耳を傾けていた。

「暗殺は内密に行われなければならないから、依頼主との接触やターゲットの確認には、気を使うの。まず、幹部の人間から私は茶封筒を受け取って、それをカイに送る。そして、その封筒の中に書かれた待ち合わせ場所で、カイはターゲットの情報を幹部から受け取る。そして、カイはターゲットを確実に仕留める。それが、暗殺までの流れなの。だから、私はターゲットも依頼主も、どんな人物なのかを知らない……。私が実行するはずの暗殺を、カイが代行していたからね……。もちろん、カイも実際に仕事を受けてターゲットを知らされるまでは、何の情報も得られないの……。」

ミキ力が深呼吸した。

「でも、カイはつい最近イレイザーを抜けたの。」

サガミがハツとした表情になった。

「幹部の人間は、イレイザーを抜けたカイを裏切り者として、私にカイの殺害を命令してきたわ……。そして、カイにも最後の仕事としてターゲットを与えていて……。」

ミキ力が、言葉に詰まった。

「さつき倉庫で一緒だった男に、カイの仕事の依頼主とターゲットのことを、初めて聞かされたの……。正直、……。愕然としたわ……。」

ミキカが、サガミの瞳を一直線に見つめた。

サガミは、さらに緊張感が高まるのを感じた。

「カイが最後に与えられた仕事の依頼主は「ロングシャドウ」。ターゲットは、「サガミ」……。つまり、あなたなの……。」

サガミは、息の止まるような心持ちだった。

「……。え……。？」

ようやく出たサガミの言葉は、その一文字だった。

ただ、信じられないという気持ちから、息の抜けるような一言が出たのだ。

「じゃあ……。カイは……。私を殺すチャンスを、近くで窺っていたってこと……。？」

サガミが、目を泳がせながら震える声で言った。

「それは、違うと思うわ！もしカイがあなたを本当に殺すつもりがあったら、それはすぐに実行されてたはず……。でも、何もせずにカイがあなたのそばにいるということは、カイはあなたを殺すつ

もりはないってことだと思う・・・！」

ミキカの表情は、必死だった。

「でも、もしこのままカイが依頼を無視し続けるとしたら、あなたはイレイザーの人間全てから命を狙われることになるわ・・・。依頼の不履行はイレイザーの信頼を著しく侵害すること・・・。裏社会では、イレイザーのターゲットにされた人間は、確実に消されると言われてるの・・・。イレイザーの中で腕のたったカイも、裏社会では「死神」とさえ噂されてたくらいで・・・。とにかく、あなたに身の危険が迫っていることを、一刻も早く伝えなければと思ったの・・・。」

サガミの顔が一気に青ざめた。

そして、突然身構える。

「じゃあ、ミキカさんも、私の命を奪おうとしてるの!？」

その、ひどく怯えた様子のサガミを見て、ミキカは、

「大丈夫！私はあなたの味方よ！初めから、私はイレイザーなんかに忠誠を誓ってないんだから！」

サガミをなだめるように、両手を挙げて言った。

その言葉に、サガミはホッと息を吐いた。

「カイも、依頼を無視すればどうなるかを知ってるはずだから、たぶん、カイはあなたをイレイザーから護るつもりでいるんだと思う

わ。カイがもしそう考えているなら、私もあなたを護るから！安心して。」

ミキカのその言葉に、サガミは完全に安心することはできなかった。

そして、夜が更けていった。

サガミは、ベッドに入って大人しく眠りにつくことは、全くできなかった。

No.17 気持ち（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。最近、更新が遅くて申し訳ありません……。どうか、見放さずに今後もお読み頂けたら幸いです（汗）

No.18 不老の男

ミキカは、サガミのもとを去った後、カーザの部屋で床に就き、朝を迎えた。

まだ夜が明けきらない早朝に目が覚めたミキカは、部屋の窓から見える海を無意識に見つめていた。

すると、

「海がよく見えるだろう？」

カーザが、あくびをしながら起きて来た。

「ガキの頃、よく家族みんなで海に行ったの覚えてるか？」

そのカーザの言葉に、ミキカは首を横に振った。

「そうだな……。まだ小さかったからな……。」

二人の間に、沈黙が生まれた。

「昨日は、ごめん……。ちょっと、言い過ぎた……。」

ミキカが、海を見ながら言った。

カーザは、その言葉にこれといった返事はせず、ただ微笑んで見せた。

「このネックレス、ちゃんと大事に持っていてくれたんだな。サガミちゃんから受け取ったよ。」

そう言って、カーザはポケットから星のネックレスを取り出した。

「それ、お母さんの形見だっけってたから。いつカーザに返そうかと思っただら、ちょうどあの子がカーザに会いたって言って、私を訪ねて来たの。」

「そっか。でも厳密に言うと、これは母さんの形見というよりは、先祖の形見って言ったほうが、正しいかもしれないんだ。」

「え？どついう意味・・・？」

ミキカが、カーザに一步近づいた。

「俺にも、正確なことは分らないんだけど・・・。」

そう言っで、カーザは過去を語り始めた。

今からさかのぼること、およそ8年前のこと。

カーザとミキカが両親の死後、二人で身を寄せ合って生活していた

頃のことだ。

イレイザーの人間に所在を掴まれ、ミキ力だけが連れ戻されてしまい、カーザは困惑していた。

当時、世話になっていた診療所の医師が、カーザをかくまってくれたおかげで、イレイザーの人間から一先ず逃れることができた。

しかし、いつ見つかってもおかしくない状況にあった。

イレイザーの魔の手に怯え、診療所の片隅で震えていた時、幼い頃に母から受け取った星のネックレスがカーザの心の支えとなっていた。

カーザは震える手で、首から提げていたネックレスを、強く握り締めた。

すると、パキッという音と共に、星のモチーフになっているトップの部分が少しずれた。

カーザは壊してしまったと思い、慌てて直そうとした。

しかし、そのずれた隙間から何やら銀製の鍵らしきものと、小さく折り畳まれた赤茶けた紙が見えた。

その紙を取り出し、広げて見てみると、診療所のある町の名と、その下に簡単な地図が記されていた。

その地図には、小さく黒い点が一つある。

それは、診療所の近くにある砂浜を指しているようだった。

カーザは、すぐにその砂浜へと走った。

それは、亡き父母からのメッセージのような気がしたからだ。

そして、地図中に記された黒い点の位置を推測し、砂浜を掘り返した。

しばらく掘っていくと、鍵のかかった木箱が出てきた。

その鍵穴にネックレスに隠されていた銀製の鍵を入れてみると、木箱の鍵は見事にあいた。

その木箱の中には、赤黒い液体の入ったビンが入っていた。

その液体を少し自分の服の裾に染み込ませると、カーザは再びそのビンを木箱の中にしまい、鍵をかけて同じ所に埋めなおした。

診療所に急いで戻ったカーザは、その液体の正体を調べ始めた。

顕微鏡で見ても、それが何なのかがカーザには分からなかった。

すると、世話になっている診療所の医師が、

「カーザ、何を調べているんだい？」

真剣に顕微鏡を覗き込むカーザを見て訊ねた。

「先生。これは、何だと思いますか？」

そう言つて、カーザは医師に顕微鏡を覗かせた。

すると、

「ん！？・・・こ、これは・・・！」

医師が驚愕の声を上げた。

そして、おもむろに本棚をひっくり返すようにして、一冊の書物を持ち出してきた。

「カーザ、これを見てみなさい。」

そう言つて、医師が差し出した本は、不死鳥研究に関する最新の文献だった。

「これは、何ですか？」

「これは、不死鳥の血液中細胞の図なんだ。最近出てきたこの本によつて、不死鳥の血液中の細胞について知られるようになったんだ。」

そう言つて、医師はカーザが覗いていた顕微鏡の倍率を上げた。

そして、

「もう一度、見てみなさい。これは、大発見かもしれないぞ・・・！」

カーザは医師にそう言われて、再び顕微鏡に目を向けた。

「……！？お……、同じだ……！！」

カーザは息を呑んだ。

カーザが見つけてきた液体は、不死鳥の血液だったのだ。

これは、世紀の大発見とも言えることだった。

そんな出来事に興奮していた医師は、この血液をどこで見つけてきたのかをカーザには訊ねず、ただカーザと二人で研究に没頭し始めた。

しかし、研究は困難を極めた。毎日毎日研究をし続けたが、いつになっても、分かることは

「不死鳥の鮮血と不死鳥の体外に出てからある程度の時間が経過した血液とでは、持つ能力が違う」ということだけで、その具体的な違いを知ることができないでいた。

そんなある日、診療所に一人の細身で眼光の鋭い男が現れた。

その男は、見たところ年齢は30代の前半〜後半といった感じだったが、左手に木製の杖を持っていた。

そして、診療所に入ってくるなり、いきなり拳銃を構えた。

「カーザっていう小僧を探している。お前か？」

その、心の無いしゃべり方の男は、銃口をカーザに向けた。

この男がイレイザーの手の者だということは、間違いなさそうだった。

「おたくは誰だね？うちには、カーザなんていう子は・・・」

バーンっ！という、一発の銃声が響いた。

カーザをかばいながら、男に近寄って行った医師が撃たれたのだ。

カーザの表情が青ざめる。

「貴様には、訊いていない。」

そう言っ、もうすでに床に落ち伏せている医師の背中目掛けて、男はもう一発銃弾を放った。

カーザの体が小刻みに震えだす。

「答えろ、小僧。お前がカーザか？」

その男の迫力に押されるように、カーザは頷いた。

「そうか。じゃあ、来い。」

そう言っ、男は震えるカーザの腕を引っ張った。

しかし、カーザは頑固に動こうとしなかった。

「死にたいか？」

カーザは思いつきり首を横に振った。

その時、男の足が床に置いてあつた本にぶつかった。

それは、不死鳥研究の文献だった。

すると男は、

「お前も、不死鳥に興味があるのか？」

笑み一つない顔で、カーザに訊ねた。

カーザは、その男の言葉に目ざとく反応する。

「あなたも、不死鳥に興味があるんですか？」

その質問に対して、男は少し考えた後、近くにあつた椅子に腰掛け
た。

「不死鳥の何を知っている？」

「それに答えれば、俺の安全と、妹の解放と安全を、約束してくれ
ますか・・・？」

カーザは、震える声で言った。

すると、男は鼻で笑うと、

「小僧、何様のつもりだ？」

と言って、銃口をカーザの額に当てた。

「きっと俺は・・・、あなたが知らないことを知っています・・・！それでも、殺しますか・・・？」

そのカーザの言葉に、男は銃口をカーザの額からどけた。

「話せ。」

そう言われて、カーザは口を開く。

「単刀直入に言います。俺は、不死鳥の血液を持っています。」

すると、男の顔色が変わる。

「何だと！？嘘じゃないだろうな！？」

男は、勢い良くカーザの胸倉を鷲掴んだ。

カーザの顔が苦痛に歪む。

「どこで手に入れた！？不死鳥に会ったのか！？」

男の、怒号のような激しい声が響いた。

カーザは、激しく首を横に振った。

すると、男が突然、何かを思い出したように静まった。

「・・・、まさか・・・。・・・小僧・・・、その血液はビンに入ってるんじゃないのか・・・？」

男は、カーザの胸倉から手を離れた。

カーザがむせ返る。

「小僧！ビンはどこだ！？」

その、明らかに先ほどまでの冷徹な様子とは打って変わって、熱くなっている男を見てカーザは、

「確かに、ビンに入っていました。でも、その在り処は言えません。」

どこか冷静な面持ちで応えた。

「何だと！！」

男が再びカーザに掴みかかった。

「あなたにとって、あのビンは大切な物なんですか？」

そのカーザの質問に、熱くなっていた男が口を滑らす。

「当たり前だ！あのビンに入っている血液で、俺は完全なる不老不死の体に・・・！！！」

男が、ハッとした表情になり、言葉を止めた。

「……「完全なる不老不死」……？」

カーザがその言葉を復誦した。

男が突然大人しくなった。

「完全って……。もしかして、あなたは不完全な不老不死の体だということですか……？」

男は黙って何も話さなくなった。

これは、有利な立場に自分が立ったのだと、カーザは悟った。

さらにカーザは、

「不死鳥の鮮血には、不老不死の能力が宿るとされてますが、あれは実は、鮮血を大量に浴びないと起こらない現象のようです。つまり、鮮血が少し体にかかったり、触れたりするだけでは、不老不死にはならないということです。しかし、一説には鮮血に触れただけでも「不老」の能力が得られるという話もあります。」

暗記していた事を口にするかのように、ペラペラと早口でしゃべった。

「あなたは、もしかして不老の体なんですか……？」

そのカーザの質問の後、二人の間には長い沈黙が生じた。

そして、しばらくすると、

「どうやら、お前はそこら辺に転がっている、低能な不死鳥研究者よりも頭が働くようだな。」

男が口元に微かな笑みを浮かべながら言った。

「お前の推測通り、俺は不死鳥の鮮血に触れた。今から何年前だったか、ライクという国にある森の中で、血を垂れ流している不死鳥を偶然見つけた。そして、その鮮血を俺はビンに採取した。その時にたまたま鮮血が手についてしまい、俺は不完全な不老不死の体、つまり不老の体となったわけだ。」

相変わらず冷たい様子の男の顔を見ながら、カーザは話を聞いた。

「初めは、自分が老いることのない体になったと知って喜んだ。だが、それは間違いだった。俺は確かに老いることはないが、決して死なないわけではない。見かけは当時のままで若々しいが、確実に死は近づいてきている。人より少し寿命が長くて、常に若い。俺はただそれだけなんだと知って、愕然とした。だから、不死鳥から採取した血液に、この俺を完全なる不老不死の体にする作用がないかと、調べ始めた。だが、調べ始めて間もなく、その血液が何者かに盗まれてしまったのさ。」

男の凍てついた瞳が、カーザをギロリとにらんだ。

「だがな、当時その血液の持つ能力を研究するように依頼した不死鳥研究家は、無能で使えない男だった。もしあのまま血液が手元にある続けて、あいつにずっと任せていたら、どちらにせよあのビンに入った血液が俺を救うものなのかどうかを知ることが、できなかっただろう。だから、これは好都合だとも言えるのだろうな。」

男が、クツクツクツと、不気味な笑いを上げた。

「小僧、さつき俺に妹がどうのと言ったな。もし、妹を解放して欲しければ、ビンに入った不死鳥の血液にどんな能力があるのか、調べ上げる。」

「え．．．!?」

カーザの表情が焦りの色に変わる。

「いいか、その間は貴様にビンは貸しておいてやろう。だがな、くれぐれも間違った研究結果を報告しないようにすることだ。もし、偽りを伝えたり、報告もしないまま妹と逃亡でもしてみろ。冷たい海の底に沈めてやる。二人別々にな。」

そう言つて、男は鋭い眼光でカーザを一睨みすると、椅子から立ち上がった。

「ちょっと、待ってくれ！俺一人で不死鳥を調査するなんて、無理だ！」

そのカーザの言葉を聞いて男は、

「じゃあ、こうしようじゃないか。調査期間は5年間。その間に有力な研究結果が得られなかったら、貴様も妹も死をもつて償う。そうしておけば、「無理」などと言わずに必死になって調べ上げるだろう？なあ、カーザ？」

カーザは拳を握り締め、唇を噛み締めた。

「ああ、そうだ。あともう一つ言っておこう。不死鳥の血液のことは他人には絶対に洩らすな。いいな。」

男は、再び杖をつきながら拳銃を片手に診療所を去って行った。

その場には、すでに息絶えた医師と、齒を食いしばるカーザだけが残された。

No.18 不老の男（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。更新大変遅くなりまして、
申し訳ありません（汗）

No.19 不老不死の男

カーザの話を、ミキカは真剣な表情で聞いていた。

そして、

「そんなことがあったなんて……。じゃあ、研究に没頭するために、私にも所在が分からないように、身を潜めたの……？」

ミキカが、カーザの顔を見て言った。

カーザは、静かに頷いた。

「本当は、研究結果が出るまでは、ミキカにもイレイザーの連中にも、見つからないようにするつもりだったんだけど……。」

「カイが見つつけちゃったんでしょ？」

ミキカが微かな笑みとため息を混じらせながら言った。

その言葉にも、カーザは頷いて見せた。

「カイが突然、俺が身を潜めてたボロい小屋に現れて、ミキカが会いたがってるって言うもんだから、それは驚いたよ。ミキカの依頼で俺を探してたってことは、カイもイレイザーの人間なんだろうと思って、間違いなく殺されると思ったからね……。」

ミキカが小さな声で笑い出した。

二人の頭の中に、当時の記憶が甦った。

「ミキカがあんたを探してるんだけど、会ってやってくれないかな？」

カーザが身を潜めていたボロ小屋に入ってくるなり、カイは万遍の笑みで言った。

カーザは体が硬直した。

「お、お、お、お前は、誰だ！？」

その、明らかに動揺しているカーザの言葉に、

「俺は、ミキカの知り合いだよ。ミキカに、あんたを探してほしいって頼まれてさ。」

相変わらず爽やかな笑顔でカイは応えた。

「まあ、いいから、とりあえず来てよ。」

そう言って、カイは足を踏ん張らせているカーザの腕を掴んで、小

屋の外へと引きずり出した。

カーザは、このまま殺されるのだろつと想像し、表情が一気に青ざめた。

しかし、引きずり出された先に待っていたのは、死ではなく、妹のミキカだった。

「カーザ！」

そう一言叫んで、ミキカがカーザのもとへと駆け寄って来た。

カーザは目を丸くしてそのミキカを見ている。

「カーザ、探したんだよ！私、てっきりカーザもイレイザーの人間に拘束されたんだと思って、心配してたんだから……！」

ミキカの瞳には微かに涙が浮かんでいた。

「……ご、ごめん……。」

カーザが呆然とした表情でミキカに言った。

二人から少し離れた所に立っているカイを、カーザが横目でチラッと見た。

そのカーザが向ける視線に気が付いたミキカが、

「あ、彼は、カイっていうの。私に協力してくれてる人で、カーザのことを探すのも手伝ってくれたのよ。」

カイのほうを見ながら言った。

「協力してくれてるって、イレイザーが雇った奴なのか？もし、そうなら信用しないほうが身のためだぞ。」

「イレイザーに雇われてるというか……、私にもよく分からないけど、私に力を貸してくれるって言っの。……でも、彼が私の代わりに仕事をこなしてくれて、……人殺しを強要されることから解放されて、正直、助かってる……。」

ミキカが苦笑いを浮かべながら応えた。

「怪しい行動があったり、下心がありそうだったら、すぐに手を切ったほうがいいぞ。」

カーザが、カイに聞こえないように小さな声でミキカに言った。

それに、ミキカはただ複雑な笑顔で小さく頷いた。

「そろそろここを離れたほうがいいかもな。万が一イレイザーの人間に見つかったら厄介だし。」

カイが、自分から離れた所にいるミキカとカーザに呼び掛けた。

「そうね。」

ミキカがカイの声に応えた。

そして、「じゃあね」とカーザのもとをミキカが離れようとした時、

カーザはとつさにミキカを呼び止める。

「あ、そうだ、ミキカ！」

その声に、ミキカは立ち止まった。

「これ、お前に預かっておいてほしいんだ。今は、俺の手元に置いておきたいからさ。」

そう言つて、カーザは首からさげていた星のネックレスをはずし、ミキカに手渡した。

「どうしたの、これ？」

ミキカが不思議そうな表情で、カーザから受け取ったネックレスを見た。

「ああ、……、母さんから貰ったんだ。」

そう言つた後、カーザはカイのもとに歩み寄つた。

「妹を、頼んだぞ。」

とても頼んでいるような表情ではない、むしろ疑るような眼差しでカイを見て、カーザは一言言つた。

カイは、万遍の笑みで頷いて見せた。

昔を思い返していたカーザとミキカのもとへ、浮かない表情のサガミが現れた。

「おはようございます。」

そう言っ、部屋に入ってきたサガミの目の下にはクマがあった。

「サガミちゃん、どうしたの？」

カーザが心配そうな表情で、サガミの様子を見て言った。

「父に会いに来ました。」

サガミが目をごすりながら言った。

「いや、そうじゃなくて……。疲れてるみたいだけど、大丈夫？」

「はい。大丈夫です。」

空元な笑顔を浮かべて、サガミは応えた。

そして、サガミはベッドで眠っている父親のもとに歩み寄った。

それに反応して、眠っていた父親が目を覚まし、二人は何気ない話をしている。

しばらくすると、部屋の戸をノックする音が響いた。

そして、ゆつくりと開いた戸の先にはダングがいた。

それを見たカーザの表情が一気に強張る。

表情が一変したカーザを見て、ミキカが開いた戸のほうを振り返る。

すると、ミキカの表情もまた一変し、強張った。

「カイの死体はどうした？海にでも投げて処分したのか？」

ダングが、寝覚めの良さそうな血色の良い表情で、カーザに訊ねた。

カーザはとつさに、

「あ、ああ。」

と、動揺した様子で答えた。

ダングの声に気が付いたサガミが、カーザたちのもとへ歩み寄る。

「あんた、何しに来たの？」

強気な態度のサガミにダングは、

「お前、どこかで見た顔だと思ってたら、カイが殺すはずだった女

だっ たんだな。」

と、少しずつサガミの方へ近寄りながら、笑顔で言った。

すると、そのダングをミキ力が制し、

「この子は関係ないわ。」

と、心なしか震える声で言い、ダングをにらみ上げた。

すると、ダングはミキ力の首を右手で鷲掴み、自らの方へ引き寄せた。

「使えねえ奴が、生意気に意見するんじゃないよ。」

そう言って、ダングはミキ力を乱暴に投げ飛ばした。

「ミキカ！」

カーザが投げ飛ばされたミキ力のもとへ駆け寄る。

「何？私を殺す気？」

怯えていることを必死に隠そうとしているサガミの額には、汗が光っている。

「苦しみたくなければ、大人しくしてろ。」

そう言って、ダングは懷から拳銃を取り出し、サガミの額にその銃口を当てた。

「よせ！やめろっ！」

カーザが、すごい剣幕でダングに掴みかかるうとした。

しかし、ダングはそれをヒラリとかわした。

カーザをかわした時に、ダングは自分が入ってきたドアの方に体が向いた。

すると、そこには、ダングにとっては信じ難い状況があった。

息が止まるほどの驚きに、声が出せないでいるダングが、やっと一言を発する。

「・・・・・・・・カイ・・・・・・・・!？」

カイは、ダングの目の前で万遍の笑みを浮かべて立っていた。

「また会ったな。」

そう言つて、カイはダングの方へとゆっくり歩み寄ってくる。

ダングの息が荒くなり、明らかに動揺を隠しきれていない。

「な、何で・・・・・・・・何で・・・・・・・・お前・・・・・・・・!？」

「俺？幽霊。」

カイは、イタズラ小僧のような、おちゃらけた笑いを上げた。

「サガミは、俺の仲間なんだよ。だから俺の手では殺せない。もちろん、イレイザーの人間にも殺させない。な？分かったら、さっさと帰ってくれよ。ここには病人もいるんだからさ。」

そう言つて、カイは硬直しているダングの背中を押しながら、出口へと促した。

すると、ダングがカイの左胸に一発の銃弾を撃ち込んだ。

銃声の後、カイの胸から煙が出た。

しかし、

「何で、分かんないかなあ？」

カイは、わざとらしく頭を抱えてみせた。

「お前、・・・・・・・・まさか、不老不死なのか・・・・！？」

ダングは目を見開いてカイの顔を見つめた。

カイは特に返答はしなかったが、否定もせずに、ただダングを部屋から押し出した。

そして、

「じゃあな。もう二度と俺の前に現れないでくれ。」

真剣な眼差しを笑顔で隠すような複雑な表情で、カイはダングに言

った。

ダングは、何も応えることなく、無表情でその場を静かに離れていった。

No.19 不老不死の男（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。久しぶりに更新致しました。
今後どうぞよろしくお願い致します。

No.20 護る

部屋の戸を静かに閉めたカイが、拳を握り締めて棒立ちしているサガミに歩み寄った。

「眠そうだな。」

緊張感のないカイの言葉に、サガミはただ大きなため息を吐き、その場にしゃがみこんだ。

そして、カイはミキカの方を振り返り、

「ミキカ、大丈夫か？ダングは、相変わらず乱暴だな。」

心配しているのか、分かりづらい表情でミキカに言った。

「……………、私、ちょっと出掛けてくる。」

そう言つて、ミキカは少しよろめきながら立ち上がると、部屋を出て行った。

それを、慌ててカーザが追いかけた。

サガミが、ばつの悪そうな表情を浮かべて立ち上がると、父親が眠るベッドの方へ歩いていった。

「何だか様子がおかしかったようだけど、何かあったのか？」

ベッドに横たわるサガミの父親がサガミに訊ねた。

サガミの父親は、大きな回復を果たしてから、さらに回復するまでに至っておらず、未だベッドから離れられない状況にあった。

「何でもないの。ちよつと色々言い合つてただけ。」

「何でもないなら、良いが……。サガミ、前にも言ったが、父さんに気兼ねせずに自分のしたいことをして良いんだよ。」

「また、そういうつまらないこと言うんだから……。気兼ねなんてしてないってば。」

「父さんはきつと、ここまで回復するのが奇跡に近かつたんだろうと思う。少しぐらいなら歩くこともできるようになつたしな。でも、やっぱり誰かの手を借りずには生活することができないというのも事実……。そうになると、サガミの手を煩わすことになってしまう。……。父さんが、死ぬまで……。」

サガミと父親の間に、重い沈黙が漂う。

「な、何言つてんの？……。もちろん、これからもずっと父さんの面倒は私がみるよ！当然でしょう？親子なんだから。」

父親は、そのサガミの言葉に微笑みは見せたものの、どこか複雑な胸中が見え隠れした様子で一つ、息を吐いた。

「……。それは、辛いな……。」

「え？」

サガミには聞こえないほどの小さな声で父親は呟いた。

それからしばらく、部屋の中に話し声は聞こえなくなった。

部屋を飛び出したミキカは、小走りでシオンの町を進んでいた。

カーザは、焦った様子でそれを追いかけている。

「おい、ミキカ！どこ行く気だよ！？」

そのカーザの声に、ミキカは反応しない。

「ミキカ！」

カーザはミキカの肩を掴み、その足を止めた。

ミキカがその勢いでカーザの方に振り返る。

「さっき、カーザだって見たでしょう？サガミちゃんがイレイザー

に狙われてるの!」

「……、ダングが言ってた、カイが殺すはずだった女って
いうのは、どういう意味なんだ……?」

真剣な表情のミキカを見て、カーザが疑問を投げ掛けた。

「ロングシャドウっていう組織から、サガミちゃんの暗殺依頼があったの……。その任務を受けたのがカイで……。でも、カイはそれを実行しなかった。だから、イレイザーの全ての人間から、サガミちゃんは命を狙われてるの……!」

「……、そういうことだったのか……。」

「もうすでに、イレイザーには所在を掴まれてるわ……。だから、サガミちゃんを逃がすしかない!」

「逃がすって、どうするつもりだよ!?」

再び歩き出そうとしたミキカを、カーザは引き止めた。

「とにかく、このシオンから遠ざけるしかないわ。シオンから出る手段は航路しかない……。それをイレイザーに塞がれでもしたら、もう、逃げる場所がなくなっちゃうでしょう!? だから、すぐに船のチケットを取って……!」

ミキカの声を遮るように、カーザが言葉を発する。

「ミキカ、何でもそこだするんだ……? 冷たいようだけど、サガミちゃんは、俺たちにとっては出会って間もない他人なんだぞ……」

？」

ミキカは、そのカーザの言葉に一瞬黙った後、

「元と言えば、私が蒔いてしまった種だから……。それに、サガミちゃんと約束したの……。護るって……。でも、一番は、……。カイがサガミちゃんを護ろうとしているから。だから、私もそうするの。」

落ち着いた様子で、カーザに心えると、一目散に船のチケット売り場へと走っていった。

しかし、チケット売り場の手前の細い路地から数人の男が現れ、そのミキカを路地へと引き込むのをカーザは目撃した。

カーザは、急いで駆け寄る。

しかし、

「女は預かった。明日朝一番に不死鳥の血とその効果の研究結果を指定のホテルまで持って来い。」

低い落ち着いた男の声が聞こえたと思った途端、カーザの意識は激痛と共に遠のいた。

沈黙していた部屋に現れたのは、頭から血を流したカーザだった。

「カーザ！？一体どうしたんだ！？ミキカは一緒じゃなかったのか！？」

カイが、ふらつきながら部屋に入ってきたカーザのもとへと、一目散に駆け寄った。

そのカイの声を聞いたサガミも、父親のベッドから離れて現れた。

「ミ、ミキカがさらわれた！！・・・、イレイザーの連中がやったんだ・・・！！明日の朝一番にホテルに来て・・・！！」

歯を食いしばりながら、カーザは息を荒げた。

とても普通ではない様子に、サガミの父親も杖をつきながらベッドから起き上がってきた。

「さらわれた！？イレイザーは何か要求してきたのか・・・？」

そのカイの問いに、カーザは黙り込んだ。

「カーザさん！何か、要求されたんですか！？」

長時間が経過したかのような、ほんの少しの沈黙の後、カーザが重い口を開く。

「……、実は、……俺は不死鳥の血を持つてる……。」

そのカーザの言葉に、カイもサガミも驚きの表情を浮かべた。

「もともとは、イレイザーのリーダーのリユウっていう男の物だった。でも、色々あつて俺の手元に渡ったんだ……。」

そして、カーザは過去の出来事を順を追ってカイとサガミに語った。

「じゃあ、その不死鳥の血が入ったビンと、ミキカを取引しようってことか……？」

そのカイの言葉に、カーザは重々しく深く頭を下げた。

「それなら、明日の朝なんて言わずに、今からさっさとその不死鳥の血を持つて、ミキカさんを連れ戻しに行きましょうー！！」

「いや、それはできない……。」

カーザがサガミの言葉に、小さな声で応えた。

「……、あくまでも、あつちの要求は不死鳥の血とその効果の研究結果なんだ……。ビンに入った不死鳥の血がもたらす効果の研究なんて、ほとんど進んでない……。そんな状態で行ったって、ミキカも俺も命を奪われて、それまでだ……。」

うな垂れて、その場に座り込むカーザのもとへ、カイが歩み寄った。

「それなら、あっちの要求なんて無視すればいい。力づくでミキカを取り返すんだ。」

カイが、カーザの肩に触れた。

しかし、カーザはそれを振り払う。

「そんなことできるわけねえだろうっ！？生まれた時からイレイザに苦しめられてる俺たちの、何が分かる！？不老不死の体を手に入れた幸せなお前なんか、……助けられてたまるかよ！」

カーザは、瞳に涙を溜めながら、すごい剣幕で怒鳴った。

その様子に驚きを隠せないサガミとは打って変わって、カイはいたって冷静な面持ちでいた。

「カーザさん、……それは、ちょっと、言いすぎ……。」

サガミが、二人の仲裁に入ろうとした瞬間、部屋の戸が勢い良く開け放たれた。

そして、戸の目の前に立つサガミ目掛けて、何者かが銃弾を連射する。

あまりに急な出来事に、カイもカーザも助けに向かうことができなかった。

サガミの生存は絶望的か……。

悪い予感がよぎるも、サガミの方をカイとカーザはゆっくりと振り返る。

しかし、そこにいたのは、呆然とした表情でしゃがみ込むサガミと、それに覆いかぶさる血まみれのサガミの父親の姿だった。

一瞬の間の後、サガミに銃弾を浴びせた人間は、一目散にその場を走り去って行った。

カイは、すぐにサガミのもとへと駆け寄る。

「サガミ!？」

カイの声に、サガミは反応しない。

しかし、その息は非常に荒い。

サガミに覆いかぶさっている父親は、かすかに息をしている。

そして、

「サ……、サガ……ミ……。」

そう言って、父親はサガミの顔に震える手を差し伸べた。

それに、ようやく硬直していたサガミが反応する。

「お父さん・・・!？」

サガミは、父親の真つ赤な手を強く握り締めた。

「・・・よ・・・かった・・・。・・・、お前を・・・、護・
・る・こ・と・・・・が、・・・で・・・き・・・た・・・。」

その言葉を最期に、父親は力なくうな垂れた。

「父さん!？・・・父さん!!？」

サガミの悲痛な声が部屋に響き渡る。

その様子に強く拳を握り締めたカイが、部屋を疾風のごとく走り去った。

No.20 護る(後書き)

こんにちは。作者のJOHNEYです。物語も最後が迫って参りました。今後ともよろしくお願い致します。

No.21 不死鳥の血

サガミは、しばらく父親にしがみ付いたまま動かないでいた。

しかし、10分足らず経過すると、無表情のまま顔をゆっくりと上げ、おもむろに父親のむくろをベッドへと運んだ。

それを見ていたカーザが、サガミに声を掛ける。

「サガミちゃん………?」

何と言って良いのか分からず、腫れ物に触るような様子で、カーザがサガミを見た。

すると、サガミはカーザの方を一直線に見ると、

「カーザさんは、カイのことを誤解してます。」

まばたき一つせずに、そう言った。

「誤解……?」

「カイは、不老不死であることを幸せだなんて思ってます。カイは、ずっと苦しみながら生きてきてるからです。誰かを失う辛さや、誰かを護れないもどかしさを一番知っているのは、間違いなくカイだと、私は思います。だから、カーザさんは、カイを誤解してます。」

鋭くも純粋なサガミの瞳に、カーザは圧倒されていた。カーザは思

わずつつむいた。

「父のことは、必ず迎えに来ます。それまで、よろしく願います。」

そう言っつて、サガミはカーザに深々と頭を下げ、その場を離れようとした。

それを、カーザがとっさに呼び止める。

「サガミちゃん、どこに・・・!？」

サガミは、その声に立ち止まりはしたものの、振り返らず、言葉も発さない。

「まさか、・・・一人でレイザーの所に行くつもりか・・・?・・・
・第一、レイザーの居場所なんて分からないだろう・・・!？」

サガミが、一歩前に出た。

「やめるんだ!一人で奴らの所に殴りこんだところで、敵う相手じゃない!返り討ちにあつて、それまでだ!命を無駄にするだけだ!」

しかし、サガミはそのカーザの言葉を背に、部屋を足早に出て行った。

カーザのもとを離れ、サガミはシオンの町に出てきた。

しかし、カーザの言う通り、イレイザーの所在が分からない状況で、こうして町を放浪していても無意味な気がした。

それでも、じっとしていることは、どうしてもできなかった。

無意識なまま歩いていると、サガミは誰かとぶつかった。

「あ、．．．すいません．．．。」

サガミが反射的に言った。

すると、

「サガミ．．．？」

それは、カイだった。

「さっきの奴、追いかけて出てきたけど、結局見失っちゃった．．．。
ごめんな．．．。」

カイの、その悲しげな瞳をサガミは見上げた。

「私、・・・父さんの敵を討つ・・・・・・・・。」

無表情のサガミが、呟くような低い声で言った。

するとカイは、

「・・・そっか……。分かった……。でも、一度気持ちを落ち着かせてからでも、遅くはないと思うな。まずは、親父さんをゆっくり眠らせてあげないか……？」

表情のないサガミの瞳を覗き込みながら、ゆっくりと言った。

すると、サガミはハツとした表情を浮かべると、

「・・・そうだね……。父さん、ゆっくり……。」

こみ上げる涙で、サガミの言葉は途絶えた。

その後、カイとサガミはカーザの部屋へと戻り、サガミの父親のむくろをシオンの町の外れの岸壁に埋葬し、そこに花を供えた。

そして、その場にサガミだけを残して、カイとカーザは再びカーザの部屋へと戻ってきていた。

部屋に戻ってきてから、カイとカーザは終始無言のままだった。

しかし、しばらくしてカーザがため息の後、口を開く。

「……ミキ力を助けるには、やっぱり、不死鳥の血の力をどうにか解明する他に手立てがない……。」

それは、カーザの独り言だった。

ブツブツと同じようなことを呟き続けている。

「でも、これまで調べて分からなかったことが、今突然解明できるわけがない……。でも、そうしないとミキ力は助からない……。」

おそらく、頭の中でも同じセリフを繰り返しているのだろう。

頭を掻きむしるカーザを見て、

「カーザ、もしかしたら、サガミが何か不死鳥の血についての情報を知っているかもしれない。サガミは、少し前まで大規模な不死鳥研究団体の研究員をやってたんだ。」

カイが落ち着いた声で言った。

すると、

「不死鳥研究・・・？・・・。ロングシャドウ・・・。そうか、どこかで聞いたことがあると思ってたんだ・・・！」

カーザが、目を見開いて閃きの表情を浮かべた。

「ただ・・・、サガミが、すぐにショックから立ち直って、協力できるような状態になれるかどうか・・・。」

すると、腕を組んで一つため息を吐いたカイの言葉の後に、まるでこだまのような速さで言葉が返ってくる。

「協力するよ。」

その声は、サガミの声だった。

「サガミ・・・！」

カイが、サガミの痛みを気に掛けるような複雑な表情で言った。

「私なら、もう大丈夫。不死鳥のことなら、私が力になるから。だって私、ミキカさんやカーザさんにも借りがあるでしょう？」

明らかに無理をしている笑顔のサガミが、さらに不自然な笑顔を作った。

カイは、そんなサガミの様子に、居たたまれない気持ちになった。

「それに、父さんだって、きっとそうして誰かの力になってる私を見たいと思ってるはずだから。私は、父さんのためにも立ち止まるわけにはいかないの！」

サガミの表情は力強かった。

どんな修羅場を潜り抜けてきたような兵よりも、強靱で芯の通った心の持ち主であることが窺えた。

サガミは、立ち直ったのではなく、父親の死を受け入れたのだ。

「こんな時に申し訳ないと思う……。でも、時間がないんだ……。協力してくれるかな……。？」

切羽詰った表情を浮かべたカーザが、サガミを懇願するような瞳で見た。

サガミは、迷うことなく、力強く一つ頷いた。

サガミの返事を受けたカーザは、すぐに隠していた不死鳥の血の入ったビンを取りに行き、戻ってきた。

そして手始めにサガミは、自分が知り得る全ての不死鳥の血に関する情報を話し出した。

「不死鳥の鮮血に不老不死の力が宿るというのは、もう100%そう言い切れるんだけど……。ただ、不死鳥の体外に出てからある程度の時間が経過した血が、持つ力っていうのは、説が二転三転してるのが事実……。」

サガミが、真剣な表情でカーザの顔を見た。

「不老不死の人間に「死」を与えるっていうのが、一番有力な説なんだよね？」

そのカーザの問いに、

「はい。でも、以前にもう一つ気になる説を聞いたことがあるんです。」

サガミが何か考える様子で答えた。

「気になる説って……？」

「はい……。実は、「再生」の能力があるというものなんです。」

「再生……？」

カーザが身を乗り出した。

サガミが、小さく頷く。

「その意味は全く分からないんですけど、他の説とはどこか違う感じがして……。」

二人の間に、軽い沈黙があった。

そして、

「……、どんな説があったって、結局実際にそれを確かめてみないことには、確証が得られない……。それに、不死鳥の血をどうするとその効果が現れるのかだって、分からない……。飲むのか？ 触れるのか？ 浴びるのか……？」

カーザが、頭を抱えて再び独り言のように呟いた。

すると、ずっと二人の傍らで窓の外を眺めていたカイが口を開く。

「確かめてみよっか？」

そのカイの言葉に、サガミもカーザも啞然とした。

「は？」

カーザが気の抜けた声を出した。

「俺は完全に不老不死なわけだし、その不死鳥の血が持つ力が何なのか、確かめられるだろう？」

カイは、いたって冷静に、しかも微笑んで言った。

「何言ってるの！？不死鳥の血には、もしかしたら「死」の力があるかもしれないんだよ！」

サガミが、怒りをあらわにして怒鳴った。

しかし、

「でも、時間がないんだ。やるしかないよ。」

カイは、二人の不意をつくかのような速さで不死鳥の血が入ったビンを取ると、その中の液体を一口飲み込んだ。

「カイ！！！」

カイのあまりに突然の行動に、サガミとカーザはただ叫んだ。

ゴクリと喉を鳴らして液体を飲み込んだカイは、一瞬静止した後、

「うつ！！！」

低いうめき声を上げた。

「カイ！？！」

サガミが、とつさに駆け寄る。

「ま……まずい……。」「

低い声でそう言うと、カイは激しくむせ返った。

サガミは、そんなカイを見て脱力した。

No.21 不死鳥の血（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。同時連載中の「時を刻む木」も、どうぞよろしくお願い致します。

No.22 ホテルにて

「なんか、特に変化はないけど、飲むものじゃなかったのかな？」

カイが、少ししかめた表情で言った。

「何で、こんな無茶するの！？万が一のことがあったら、どうするつもりだったの！？」

脱力していたサガミが、カイに掴みかかるような勢いで怒鳴った。

すると、カイはそのサガミの言葉に、ただ口元に笑みを浮かべて応えた。

結局、不死鳥の血にどんな力があるのかは、はっきりとした答えが出ず、振り出しに戻ったような状況になってしまった。

そうしている間に、夜明けはすぐそこまで来ていた。

カーザとサガミが、ああでもないこうでもない論争している傍らで、カイは再び窓の外を眺め始めた。

サガミには、先ほどの行動を無茶だと言われたが、カイにとっては

そうではなかった。

むしろ、一抹の希望さえ抱いていた。

「死」というものに無縁になってしまったカイにとって、唯一の「死」への道しるべとなる可能性を秘めていたからだ。

しかし、それは叶わなかった。

カイは絶望に触れたような気さえしていた。

不死鳥がカイに与えた呪いは、残酷なほど根強いものだったのだ。

カイは、小さく一つ、息を吐いた。

そして、夜が明け、新たな朝を迎えた。

夜通し不死鳥研究の文献を読みあさり、論争していたサガミとカイがだったが、結局有力な答えは出ず、約束の朝を迎えてしまった。

うつむいたまま、カーザは不死鳥の血が入ったビンを手を取った。

そして、三人は暗黙のまま部屋を出て、指定されたホテルへと向かった。

ホテルのロビーに入ると、すぐに男が三人のもとへと歩み寄って来た。

そして、三人を最上階の部屋へと案内した。

そこは、フロアの三分の一程を占める広さのスイートルームだった。

三人が部屋に入るとすぐに、立派な木製の椅子にこちらに背を向けて腰掛けた男と、その傍らで腕を組んで立つ、ダングの姿が目に入った。

そして、

「ミキカ！」

ダングの横には、後ろ手に縛られたミキカの姿があった。

それに思わず駆け寄ろうとしたカーザを、三人を部屋に案内した男が制止した。

ダングが男に部屋から出て行くように目で合図すると、男は素直に部屋から出て行った。

「遅かったな。待ちくたびれたぞ。」

椅子に腰掛けている男が、振り向きざまに言った。

そして、こちらを向いた男を見て、カイが明らかに動揺の色を見せる。

「さっさと、そのビンをリュウさんに渡せ。」

ダングが、カーザに歩み寄った。

そして、

「ああ、そうだ。」

カーザの横にいるカイを横目に見て、ダングが何かを思い立ったような表情になった。

「リュウさん、実はこいつ、不老不死なんですよ。生意気にも。」

ダングが、カイを指差した。

すると、

「不老不死だと？小僧、貴様どこかで見た覚えがあるな。」

レイザーのリーダー、リュウが、目を細めてカイを見て言った。

カイの瞳が鋭くなる。

「覚えてるのか・・・？光栄だね。あんたと俺が会ったのは、70

年以上も前のことだけだな・・・。」

カイが、力の入った表情で言った。

サガミとカーザは、二人のやりとりを不思議そうな表情で見つめている。

「リュウさん、一体どういうことですか・・・？」

ダングも、理解しきれない様子で、リュウに訊ねた。

しかし、その問いにリュウは答えず、少し考え込んだ後に、クスクスと笑い出した。

「すっかり思い出したみたいだな。」

不気味に笑うリュウに、カイが微かな笑みを浮かべた挑戦的な表情で言った。

「エイミは、さぞかしお前を怨んでるだろうな。」

リュウは、嫌味な笑いを上げた。

そう、リュウはカイがかつて愛したエイミの夫だった男。

つまり、エイミを殺した男。

エイミを苦しめていた男。

カイが強く両拳を握り締めた。

「まあ、そんなことはどうでもいい。カーザ、不死鳥の血には、どんな力があるか分かったんだろうな？」

リュウが、杖を片手に立ち上がった。

そして、その若々しい容貌とは似つかわしくないほどの危うい足取りで、カーザに歩み寄って来た。

カーザは息を呑む。

「こ、この不死鳥の血には、・・・「再生」の能力があります・・・」

何も解明できていないにも関わらず、カーザは苦し紛れにサガミから聞いた新説を口にした。

「再生？つまりどういう力だ？」

リュウも、その新説は初耳だった様子で、興味津々に聞き返してきた。

一度、小さく深呼吸してから、カーザは語り出した。

それを、不安そうな瞳のミキ力が見つめる。

「再生とはつまり、悪化・老弱した組織を組み立てなおす力のことを言います。治癒とも言いますが、それ以上の能力があると思われず。あなたのように、完全な不老不死の体ではない者がこれを摂取すれば、老弱の進んでしまった部分を再生し、完全なる不老

不死の体を手に入れられる結果を得られるでしょう……。」

そのカーザの説明は、とても苦し紛れにでっち上げた研究結果とは思えないほど説得力があった。

当然、リュウもそれを信じている様子になり、

「なるほど。よくそこまで調べ上げたな。」

と、勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

少しの沈黙が漂った後、リュウは突然カーザの手からピンを奪い取ると、その中身を一滴残らず飲み干した。

緊張したような面持ちのカーザと、真剣な表情のカイとサガミは、手に汗を握った。

ミキカも、不安をより一層大きくしたような表情で、状況を見守っている。

そして、

「リュウさん!？」

リュウは、言葉を発さないまま、その場に力なく倒れこんだ。

そして、小さく唸り声を上げている。

予想外の展開に、カーザとサガミが顔を見合わせた。

「ど、どういうことなの・・・!?」

ミキカが叫んだ。

「貴様ら、リユウさんに一体何をした!?」

ダングが、恐ろしいほどの剣幕でカーザに掴みかかった。

カーザは予想していたよりも良い方向にことが運んで嬉しい反面、怒り狂ったダングの逆鱗に触れたような状況に、複雑な表情を浮かべた。

そんな中途半端な顔をしているダングを勢いよく投げ飛ばし、ダングはミキカを羽交い絞めにした。

「お前ら全員殺す・・・!まずはミキカからだ。」

そう言つて、ダングは短刀を懐から取り出し、その刃先をミキカの左胸に向かって振り下ろした。

しかし、真っ先にカイが駆け寄り、その短刀の刃を握り締めてそれを阻止した。

ダングが血走った目でカイをにらみ付ける。

「化け物め・・・!邪魔立てするな!」

カイは、怒鳴りつけてきたダングに、一発強烈なパンチをお見舞いし、ミキカをその手から解放した。

「カイ！」

ミキカが肩を震わせながらカイの背後に隠れた。

「どけ！カイ！」

カイに殴り飛ばされよろめいた先に置いてあつた銃を構えたダングが、叫んだ。

「お前には、撃つだけ無駄なのは分かってんだよ！」

そう言つて、ダングがジリジリとカイとミキカの方へと歩み寄ってくる。

そして、

「あるいは、腕を撃ち落すくらいのことではできたりするのか・・・？」

カイの至近距離に歩み寄つたダングが、銃口をカイの左腕に押し当てた。

冷静な面持ちのカイと、荒い表情のダングがにらみ合う。

そして、銃声は一発、部屋に響いた。

勢いで、カイは後ろによろめく。

「ちっ！」

ダングは舌を鳴らして、その手に持つ銃の銃口をミキカに向けた。

しかし、その手をカイが蹴り上げ、銃は遠くへ飛んでいった。

「この野郎！」

完全に頭に血が上ったダングが、カイに殴りかかってきた。

その間に、

「ミキカ！早く離れろ！」

カイが、しゃがみ込んでいるミキカに叫んだ。

そして、ミキカは大きく頷くと、サガミとカーザのもとへと必死に走っていった。

No.23 再生

「ミキカ！」

ダングに投げ飛ばされた時にぶつけて、顔にアザのできたカーザが、震える声で叫んだ。

「良かった・・・！ミキカさん、無事で本当に良かった・・・！」

サガミが、無傷のミキカを見て、胸を撫で下ろした。

三人は、不老不死のカイがダングにやられる可能性をゼロとみて、完全に安心しきっている。

しかし、カイはダングに苦戦している様子が見られる。

お互いの無事を確かめ合い、ホッとしているカーザとミキカを尻目に、サガミはカイの様子を見つめていた。

そして、

「カイ・・・？」

サガミは、カイの様子がおかしいことに気がつく。

殴りかかってくるダングに応戦する際、カイは右手しか使っていないのだ。

しかも、使っていない左腕は、力なくぶら下がっている。

大量の出血も見られる。

先ほどダングに銃で撃たれたのは、左腕だった。

「まさか・・・!!」

サガミは青ざめた表情で、カーザのもとへ駆け寄った。

「カーザさん！」

サガミの必死な様子に、カーザとミキカの表情が引き締まる。

「もしかしたら、・・・カイは、もう、不老不死の体じゃないのかも・・・!!」

そのサガミの言葉に、カーザとミキカは呆然とする。

「ど、どういう意味・・・？」

カーザが複雑な表情で訊ねた。

「だって、カイは銃で頭を撃たれても傷一つ残らないで、しかも血だって一滴たりとも流さなかったでしょう!?なのに、・・・!」

そう言っつて、サガミは殴り合うカイとダングの方を見た。

それに合わせて、カーザとミキカもそちらを向く。

そして、カーザは目を見開き、

「・・・・・・・・再生・・・・・・・・？」

呟いた。

「サガミちゃん、もしかしたら、「再生」の力っていうのは・・・、正しい答えだったのかもしれない・・・・・・・・。」

カーザが、倒れているリュウの方を見た。

サガミとミキカが、真剣な表情でカーザの言葉に耳を傾ける。

「・・・この、リュウって男は、「不完全な不老不死」。つまり、見た目としては老けることはなく、人より「死」というものから離れているけど、遠い未来には確実に死がやってくる体。一方、カイは「完全なる不老不死」。そのカイがああビンに入っていた不死鳥の血を飲んでも、表面的には何も起こらなかった。でも、リュウには恐ろしいほど明確に効果が表れたように見える。」

カーザは、カイの方を見た。

「俺が思うに、「不老不死」っていうのは、「停止」ってことなんじゃないかな・・・？」

「停止・・・・・・・・？」

サガミが真剣な眼差しをカーザに向けた。

「そう。つまり、老いる時間と死へのリミットを停止させるということ。」

「じゃあ、「再生」っていうのは・・・」

サガミが大きく目を見開く。

「停止していたものを、再び動かし始める力ってことになるのかも・・・。」

カーザが、サガミとミキカの方を振り返った。

「不完全な体で、リユウはここまで生きてしまった。だからきつと、その付けがこうして回って来たんだよ。そして、カイは完全に停止していたものが再生された。だから、カイは、ああして普通にしているんじゃないかな・・・？」

そうして、「不老不死」というものに一つの答えが出ようとしている間にも、カイとダングの殴り合いは続いていた。

息を切らせたダングが、カイを突き飛ばし、

「ちょっと、一服させろよ。」

ポケットから出したタバコに火をつけた。

カイも、大人しく突き飛ばされた先で、静止した。

ダングは、煙を口からフウッと吐くと、

「カイ。俺はな、お前に初めて会ったときから、お前のことが嫌いだった。」

口元に微かな笑みを浮かべながら言った。

「知ってたよ。」

カイが、無表情で答えた。

「じゃあ、何でだか分かるか？」

そのダングの言葉には、カイは一度首をかしげた後、

「俺が、あんたより少し背が高いからか？」

とぼけた表情で答えた。

「てめえ、バカにしてんのか!？」

ダングは、カイに向かって吸っていたタバコを投げつけた。

「・・・お前が、ミキカのそばにいたからだ。」

ダングは、すぐに落ち着いた表情を浮かべて言った。

カイは、その言葉に少しハツとした表情になる。

そして、

「俺は、お前なんかミキ力を渡すつもりはない。」

ダングが、一歩カイに歩み寄った。

「ミキ力をお前に渡すくらいなら、俺のこの手で殺して、ミキ力を永遠のものにする。」

そのダングの言葉を聞いた瞬間、カイは突発的にダングを一発殴り飛ばした。

そして、よろめいたダングの胸倉を掴み、自分のほうへとダングを引き寄せた。

「そんなことさせるかよ。ばか。」

カイは、ダングの怒りをかうような憎たらしい表情で言った。

案の定、ダングは逆上してカイに強烈なパンチを打ち込み、倒れたカイに馬乗りになって何度も何度も殴り続けた。

しかし、ダングは何度か殴り続けた後、突然その手を止めた。

「どうせ、・・・渾身の一撃をくらわせたところで、お前は死なないんだろう?」

そのダングの言葉に、カイが口の中に溜まった血を横に吐き出し、

「あんた、本当にバカだな。」

と、自分の上に馬乗りになっているダングを見上げて言った。

「何っ!？」

ダングが、カイを殴ろうという姿勢になる。

「気付いてないみたいだから、言っけど。俺、もう不老不死じゃないから。」

その、カイの言葉に、ダングは一瞬固まった。

「何を言い出すかと思えば……。そんな言葉に騙されねえよ。」

そう言っで、ダングはカイの上からどいた。

カイはゆっくりとしたモーションで立ち上がった。

そして、

「疑り深いねえ。でも、本当だぜ。不老不死の体だった時は、銃で撃たれようが剣で斬り付けられようが、血も出なかったし、負った傷なんて一瞬で完治してた。でも、今の俺を見てみなよ。」

カイは、微笑みを浮かべながら自分の血を手でふき取った。

「こんな大量出血して、さっき撃たれた腕だつて動きやしない。意識も朦朧としてきて、今にも倒れそうだ。俺は、100年ぶりくらいに、この生傷の感触を味わってるんだぜ。」

カイは、どこか楽しそうにしている。

ダングは、そのカイのふざけた様子に、少しいきり立つ。

そして、フラついているカイの首を掴み、勢い良くカイを壁に押し付けた。

カイの表情が歪む。

「じゃあ、確かめてみようじゃないか。お前が本当に不老不死じゃないのかを。」

そう言つて、ダングは近くに転がっていた短刀を手にとった。

短刀の刃先が自分の顔に向いていても、カイの表情に曇りはない。

むしろ、何か悟りを得たような落ち着いた表情にさえ見える。

しかし、それは明らかにカイの危機的状況であることは、言うまでもない。

「あと、もう一つ、俺がお前を嫌いな理由を思い出したな。」

ダングが、不敵な笑みを浮かべながら言った。

カイが、訊ね返すような表情を浮かべる。

「お前のその、落ち着き払った表情が、どうもイライラするんだよ。」

カイは、そのダングの言葉にフツと笑いを一つもらすと、

「落ち着いてて当然だろう？だてに１００年以上生きてないよ。ダング、四の五の言っていないで、さっさと殺れば？」

呆れたような、何ともダングをバカにしたような表情を浮かべて言った。

そのおかげで、ダングの怒りは最高潮に達する。

カイの首を掴んでいる手に、さらに力が入る。

「このやろおっ！！」

ダングが怒鳴り声を上げ、振り上げた短刀をカイの顔に突きたてた瞬間、部屋に突如二発の銃声が響く。

そして、次の瞬間にはダングの苦しみの声が部屋に響いた。

カイは、目の前で悶えているダングを啞然とした表情で見つめた。

そして、そこから少し離れた所で、ドサツという音がした。

カイが、そちらを振り向くと、そこには震える手で銃を握り締め、その場に座り込むサガミの姿があった。

「サガミ・・・？」

カイは、すぐにサガミのもとへと駆け寄った。

サガミの後ろでは、呆然とした様子のミキカとカーザがいた。

二人も突然の展開に、驚きを隠せない様子だ。

「サガミ？」

カイは、サガミのもとへ駆け寄ると、すぐに銃を持つサガミの手を握り締めた。

すると、サガミが我に返ったように、カイの目を見つめた。

そのサガミの瞳は少し潤み、唇も小刻みに震えていた。

「わ・・・私・・・撃っちゃった。」

サガミが、複雑な笑みを口元に浮かべながら言った。

「カイ・・・？・・・これって、・・・仇を討ったことになるのかな・・・？」

カイは、静かにサガミの言葉に耳を傾けていた。

「・・・・・・・・、私、カイが死んじやうと思って・・・・。カイがいなくなっちゃうと思って・・・・」

サガミは、涙をこらえながら震える声で言った。

すると、カイの表情が突然綻び、

「ありがとう。」

呟くような声でサガミに囁くと、おもむろにダングのもとへと歩み寄った。

カイは、ダングに短刀を向けられた時、むしろ、左腕に銃を向けられた時から、「死」への希望をみていた。

不老不死の体の中には叶わなかった「死」というものに、ようやく巡り合えると、内心ホッとしていたからだ。

しかし、それは浅はかな思いだったのだと、カイは今気がついた。

「不老不死」という呪いから解き放たれた今こそが、カイにとっての人生の始まりなのだ。

これまで苦しみ抜いたからこそ、「生きる」必要があるのだ。

カイは、そう悟った。

そして、自らに死を導こうとしていたカイを、サガミが、言わば「生きさせた」。

つまり、カイの浅はかな思いなど、純粹で勇ましく真っ直ぐなサガミには到底敵わないのだ。

右手を二発の銃弾に撃ち抜かれたダングは、うめき声を上げながら悶えていた。

「あの、アマ・・・許さねえ・・・!!」

しかし、ダングの右手はすでに言う事をきかなくなっていた。

「ダング、あんたの右手はもう再起不能だよ。そんな完全に撃ち抜かれてたら、日常生活にだって支障をきたすだろうしね。ましてや、殺し屋なんて続けられないだろう。」

カイは、地面に落ち伏せているダングの目の前にしゃがんだ。

「それに、肝心のイレイザーのリーダーは、もう寝たきり老人。死を待つのみってかんじだ・・・。そんな奴に付いて来る奴もいないだろうし、あんたがまとめ上げようとしても、たかが知れてる。イレイザーは、自然消滅が先の山だな・・・。」

そして、

「ダング、負けたんだよ。あんたも、イレイザーも・・・。」

複雑な表情のカイの言葉を聞いて、ダングは音がするほど歯を食いしばってはいたものの、その場で脱力して静止した。

無事、ミキカを取り戻し、カイ達はホテルからカーザの部屋に戻ってきた。

しばらくしてからサガミは、独りシオンの港へと出て行った。

部屋には、カイとカーザとミキカの三人になった。

「助けてくれて、ありがとう。」

ミキカのその一言の後、部屋の中には会話が一つも生まれずにいた。そして、しばらくしてからカイが口を開く。

「・・・イレイザーがこの先壊滅したとしても、俺やイレイザーの人間全てが犯した罪が消えるわけじゃない・・・。俺は、不老不死の体で、「死」というものをどこか軽く考え過ぎていたのかもしれない・・・。今こうして生きているということが、どんなに掛け替えのないことなのかってことに、気付いてなかったんだ・・・。」

真剣な表情で、カイは語った。

すると、

「……実は、サガミちゃんに「カイを誤解してる」って怒られたよ……。俺は、お前が不老不死であることを苦しみと思っているとは、思ってたよ……。悪かったよ……。ごめん……。」

カーザがカイに深々と頭を下げた。

カイは、ただ、どこか寂しげな表情で、そのカーザの頭を上げさせた。

そして、少しの沈黙の後、

「これまで犯してきた数々の罪を償いながら、しょく罪に生きるのが、これからの俺の「生きる」意味になる……。もちろん……。」

カイは黙り込んだ。

その言葉を聞いて、ミキカがすぐに口を開く。

「カイ……。」

悲しげな瞳のカイが、ミキカの声に反応した。

「ずっと……、いつ言おうかって、思ってた……。カイから私の曾祖母の話聞いた時に、一つ思い出したことがあったの。でも、伝える機会を見失っちゃって……。」

カイもカーザも、不思議そうにミキカを見つめた。

「以前にね、私の祖母、つまりルミの書いた日記を見たことがあった。その中で、すごく印象的だったところがあって・・・。」

ミキカは、日記に記されていたことを少しずつ思い出しながら語った。

月×日

昨日の夜、幼い頃の夢を見た。

母がまだ生きている頃の夢だ。

当時、私はまだ3歳程で、記憶としてはとても曖昧なものだが、根強い思い出が残っている。

父は、お世辞にも良い父親であつたとは言えない人だった。

母をいつも泣かせていた。

しかしある日、不思議な青年と母は近所の林で落ち合うようになった。

その青年は、見た目の若さからは想像できないほど落ち着いた様子で、母は彼に好意を持っていた。

私も、彼の優しさや暖かさに触れるにつれて、彼が私の父親だったらどんなに幸せだろうとさえ感じていた。

彼に出会ってから母は、驚くほどの変化があり、笑顔が増え、将来への希望などなかっただろう時とは比べものにならないほど、明日への希望に満ち溢れていた。

そんなある日、母は私にこう漏らしたのだ。

「今という幸せな時が常に最高の時で、それが明日への希望に繋がっている。これ以上の幸せは、きつとないだろう。今が幸せであり過ぎるから。」

その言葉は、私の記憶に根強く残っている。

昨日の夢の中でも、母は満弁の笑みで私にそう、語りかけてきた。

あの不思議な青年が、どうか今、幸せでありますように。

それは、カイにとって思わぬ知らせだった。

ルミが生前、そのような日記を残していたとは、カイにとっては意外な事実だった。

「ちゃんと全て覚えたわけじゃないから、多少違うところがあるかも知れないけど、少なくとも、日記に書かれた「不思議な青年」っていうのは、カイのことで、私の曾祖母や祖母は、カイのことを怨んだりしていないってことは、私にも分かるわ……。」

カイは、呆然としている。

「カイ、あなたは初めから償う必要なんてなかったのよ……。むしろ、あなたは感謝され、……。愛されていたのよ。」

放心状態のカイの肩に、ミキ力が触れた。

「カイ、二人が願っているのは、あなたが苦しむことじゃない。幸せであることよ。」

ミキ力は、真っ直ぐカイの瞳を見て言った。

すると、表情のないカイの瞳から、一粒の涙がこぼれ落ちた。

サガミは、シオンの港から大海原を見つめていた。

イレイザーの任務不履行によって、ロングシャドウは一先ず手を引き、サガミを襲う輩は消えた。

サガミはようやく、静かな気持ちでシオンに立つことができたような気がしていた。

しばらく経って、シオンの港に独り佇むサガミの横に、静かにカイが現われた。

そのカイの表情は、どこか柔らかで、ここ最近の沈んだ様子のカイとは、どこか違っていた。

「カイ、諦めなくて良かったね。」

そのサガミの言葉に、カイが不思議そうな表情を浮かべる。

「ミキカさんを救うこと。」

するとカイは、一つため息を吐いた。

「結局、俺はミキカを救えたのかな・・・？」

「何言ってるの？ミキカさんは、イレイザーっていうしがらみから解放されて、唯一の肉親であるカーザさんと、何からも怯えることなく暮らしていくことが、できるようになったんだよ！それは、幸せなことでしょう？」

その、サガミの言葉に、カイは一瞬の間の後、笑い出した。

サガミも、何故かそれにつられて小さな笑いがこみ上げた。

「やっぱり、サガミには敵わないな。」

そのカイの呟く声は、サガミには聞こえなかった。

「私ね、明日、シオンを出ようと思うんだ。それで、カイオウ大陸に渡って、ライク国の森に向かうつもり。」

そう言って、サガミはポケットから紅い羽を取り出した。

「そっか。」

「うん。それで、今度は不死鳥の羽じゃなくて、本物の不死鳥をこの目で見えるんだ！」

「そっか。」

カイの表情が優しい笑顔に変わった。

すると、次の瞬間、サガミの手から羽が突風に乗って空高く舞い上がった。

「あ!!」

二人の声が合わさり、二人が同時に上を見上げた瞬間、そこには紅の美しい羽を広げて飛ぶ、神秘の鳥がいた。

まるで、ここで解かれた一つの呪いを拾いにきたかのように。

No.24 最終章（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。ついに完結しました！全24話、至らない点が多々あったかと思いますが、ここまで見捨てずにいてくださった方々に、感謝の一言です。これからも、どうぞよろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8508a/>

THE ENDS OF THE LIFE

2011年1月19日21時19分発行